

# 歌行燈

泉鏡花

青空文庫



宮重<sup>みやしげ</sup>大根<sup>なみ</sup>のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみそなわす、七里のわたし浪ゆたかにして、来往の渡船難なく桑名につきたる悦びのあまり……

と口誦<sup>くちずき</sup>むように独言<sup>ひとりごと</sup>の、膝栗毛<sup>ひざくりげ</sup>五編<sup>ごへん</sup>の上の読初め、霜月十日あまりの初夜。中<sup>な</sup>空は冴切<sup>さえき</sup>つて、星が水垢離<sup>みずごり</sup>取りそうな月<sup>つき</sup>明<sup>あかり</sup>に、踏切の栈橋を渡る影高く、灯<sup>とも</sup>ちらちらと目の下に、遠近<sup>おちこち</sup>の樹立<sup>こたち</sup>の骨ばかりなのを視<sup>なが</sup>めながら、桑名の停車場<sup>ステーション</sup>へ下りた旅客がある。

月の影には相応<sup>ふさわ</sup>しい、真黒<sup>まっくろ</sup>な外套<sup>がいとう</sup>の、痩<sup>や</sup>せた身体<sup>からだ</sup>にちと広過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、真新しいはさて可<sup>い</sup>いが、馴<sup>な</sup>れない天窓<sup>あたま</sup>に山を立てて、鰐<sup>つば</sup>をしつくりと耳<sup>みみ</sup>へ被<sup>かぶ</sup>さるばかり深く嵌<sup>は</sup>めた、あまつさえ、風に取りられまいための留<sup>とめ</sup>紐<sup>ひも</sup>を、ぶらりと皺<sup>しな</sup>びた頬へ下げた工合<sup>ぐあい</sup>が、時世<sup>ときよ</sup>なれば、道中、笠も載<sup>の</sup>せられず、と断念<sup>あきら</sup>めた風に見える。年配六十二三の、気ばかり若い弥次郎兵衛。

さまで重荷ではないそうで、唐草模様の天鵝絨<sup>びろうど</sup>の革靴<sup>かばん</sup>に信玄袋<sup>ひきから</sup>を引搦<sup>ひきから</sup>めて、こいつを

片手。片手に蝙蝠傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤に酒汲みかわして、……と本文にある処さ、旅籠屋へ着の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾けて参ろうかな。（どうだ、喜多八。）と行きたいが、其許は年上で、ちとそりが合わぬ。だがね、家元の弥次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴の喜多八にはぐれて、一人旅のとほとほと、棚からぶら下った宿屋を尋ねあぐんで、泣きそうになつたとあるです。ところで其許は、道中松並木で出来た道づれの格だ。その道づれと、何んと一口遣うではないか、ええ、捻平さん。」

「また、言うわ。」

と苦い顔を渋くした、同伴の老人は、まだ、その上を四つ五つで、やがて七十なるべし。臘虎皮の齔なし古帽子を、白い眉尖深々と被つて、鼠の羅紗の道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿。色褪せた鬱金の風呂敷、真中を紐で結えた包を、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を手に一つ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしやんとした、人柄の可いお爺様。

「その捻平は止しにさつしやい、人聞きが悪うてならん。道づれは可けれども、道中松並木で出来たと言うで、何とやら、その、私が護摩の灰ででもあるように聞えるじや。」と

杖を一つとんと支くと、後の雁が前になつて、改札口を早々と出る。

わざと一足後へ開いて、隠居が意見に急ぐような、連の後姿をじろりと見ながら、

「それ、そこがそれ捻平さね。松並木で出来たと云つて、何もごまのはいには限るまい。もつとも若い内は遣つたかも知れんてな。ははは、」

人も無げに笑う手から、引手繰るように切符を取られて、はつと駅夫の顔を見て、きよとんと生真面目。

成程、この小父者が改札口を出た殿で、何をふらふら道草したか、汽車はもう遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のように月下に吐いて、真蒼な野路を光つて通る。……

「やがてここを立出で辿り行くほどに、旅人の唄うを聞けば、」

と小父者、出た処で、けろりとしてまた口誦んで、

「捻平さん、可い文句だ、これさ。……」

時雨蛤みやげにさんせ

宮のおかめが、……ヤレコリヤ、よオしよし。」

「旦那、お供はどうで、」

と停車場前の夜の隈に、四五台朦朧と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組

みをして、のっそり出る。

これを聞くと弥次郎兵衛、口を捻ねじて片頬かたほえ笑み、

「有ありがて難え、凶星という処へ出て来たぜ。が、同じ事を、これ、（旦那衆戻り馬乗らんせんか、）となぜ言わぬ。」

「へい、」と言ったが、車夫は変哲もない顔がんしょく色で、そのまま棒立。

## 二

小父おじご者は外套の袖をふらふらと、酔ったような風ふう附で、

「遣やれよ、さあ、（戻馬乗らんせんか、）と、後ご生だから一つ気取ってくれ。」

「へい、（戻馬乗らんせんか、）と言うでございますかね、戻馬乗らんせんか。」  
と早口で車夫は実じつ体。

「はははは、法ほう性寺入道前しやうじのにゆうどうさきの関白太政大臣かんぱくたじやうだいじんと言ったら腹を立ちやった、法性寺入道前の関白太政大臣と来ている。」とまたアハハと笑う。

「さあ、もし召して下さい。」

と話は極きまつた筈はずにして、委細構わず、車夫は取とつ着ついて梶かじ棒ぼうを差向ける。

小父者、目を据すえてわざと見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よオしよし。」

「いや、よしではない。」

とそこに一人つくねんと、添そえ竹だけに、その枯かれ菊ぎくの縫すがつた、霜おきなの翁なは、旅のあわれを、

月空に知つた姿で、

「早く車を雇やわつしやれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、何を当あてにぶらつこうで。」

と口叱くちご言ごで半つば眩ぶやく。

「いや、まず一つ、(よヲしよし、)と切出さんと、本文に合あわぬてき。処へ喜多八が口

を出して、(しようろく四し銭せんで乗るべいか。)馬うま土かたが、(そんなら、ようせよせ。)と

言いいやす、馬うまがヒインヒインと嘶いばう。」

「若いもの、その人に構かうまい。車を早く。川口の湊みなと屋やと言う旅籠屋はたごやへ行くのじゃ。」

「ええ、二台でござりますね。」

「何んでも構かわぬ、私わしは急いそぐに……」と後うしろ向むきに掴つかまって、乗のつた雪駄ゆきだを爪つま立てながら、

蹴け込みこへ入れた革靴かたがを跨またぎ、首くびに掛かけた風呂敷包ふろしきみを外あずしもしないで揺ゆつておく。

「一蓮託生、死なば諸共、捨平待ちやれ。」と、くすくす笑つて、小父者も車にしやんと乗る。……

「湊屋だえ、」

「おいよ。」

で、二台、月に提灯の灯黄色に、広場の端へ駈込むと……石高路をがたがたしな  
がら、板塀の小路、土塀の辻、径路を縫うと見えて、寂しい処幾曲り。やがて二階屋が  
建続き、町幅が糸のよう、月の光を廂で覆うて、両側の暗い軒に、掛行燈が疎に白く、  
枯柳に星が乱れて、壁の蒼いのが処々。長い通りの突当りには、火の見の階子が、遠山  
の霧を破つて、半鐘の形活けるがごとし。……火の用心さつさりやしよう、金棒の  
音に夜更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達は宵寝と見え  
る、寂しい新地へ差掛つた。

輻の下に流るる道は、細き水銀の川のごとく、柱の黒い家の状、あたかも獺が祭礼をし  
て、白張の地口行燈を掛連ねた、鉄橋を渡るようである。

爺様の乗つた前の車が、はたと留つた。

あれ聞け……寂寞とした一条廓の、棟瓦にも響き転げる、轍の音も留まるば



かり、灘なだの浪を川に寄せて、千里の果はても同じ水に、筑前の沖の月影を、白銀しろがねの糸で手繰ったように、星きらに晃きらめく唄の声。

博多はかたおび帯しめ、筑前ちくぜんしほり絞、

田舎の人とは思われぬ、

歩ある行く姿が、柳町、

と博多節を流している。……つい目の前まへの軒陰のきかげに。……白地の手拭てぬぐい、頬ほおかむり、すらりと瘦やせぎすな男の姿の、軒のその、うどんと紅べにで書いた看板の前に、横顔ながら俯うつむ向いて、ただ影法師のようにたたずイむのがあった。

掬平うなじはフト車の上から、頸うなじの風呂敷包のまま振向いて、何か背後うしろへ声を掛けた。……と同時に弥次郎兵衛の車も、ちようどその唄う声を、町の中で引ひっぱ挟さんで、がつきと留とどまった。が、話の意味は通すぜずに、そのまま掬平ひきだのがまた曳出ひきだす……後あとの車も続いて駈かけ出す。と二台がちよつと摺すれ摺すれになつて、すぐ旧もとの通り前あとさき後に、流るるような月夜の車。

お月様がちよいと出て松の影、

アラ、ドッコイシヨ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたように、霜を切つて、唄い棄てた。……盃屋の門に博多節を弾いたのは、転進をやや縦に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、その柄で弾くようにして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「ご免なさいよ。」

頬被りの中の清しい目が、釜から吹出す湯気の裏へすつきりと、出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うっかり聞惚れていた亭主で、紺の筒袖にめくら縞の前垂がけ、草色の股引で、尻からげの形、によいと立って、

「出ないぜえ。」

は、ずるいな。……案ずるに我が家の門附を聞徳に、いぎ、その段になった処で、件の（出ないぜ。）を極めてこまそ心積りを、唐突に頬被を突込まれて、大分狼狽えたものらしい。もつとも居合わせた客はなかった。

門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、三味線を斜にずっと入つて、

「あい、親方は出ずとも可いのさ。私の方で入るのだから。……ねえ、女房さん、そんな

ものじやありませんかね。」

とちと笑声が交つて聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うっかり気を取られて、釜前の湯気に朦として立つていた。……浅葱の襷、白い腕を、部厚な釜の蓋にちよつと載せたが、丸鬘をがつくりさした、色の白い、齒を染めた中年増。この途端に颯と臉を赤うしたが、竈の前を横ツちよに、かたかたと下駄の音で、亭主の膝を斜交いに、帳場の銭箱へがつちりと手を入れる。

「ああ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戲だ、強請んじやありません。こつちが客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六畳ばかりの市松畳、そこへ上れば坐れるのを、釜に近い、床几の上に、ト足を伸ばして、

「どうもね、寒くつて堪らないから、一杯御馳走になろうと思つて。ええ、親方、決してその御迷惑を掛けるもんじやありません。」

で、優柔しく頬被りを取つた顔を、と見ると迷惑どころかい、目鼻立ちのきりりとした、

細<sup>ほそ</sup>面<sup>おもて</sup>の、<sup>まぶた</sup>瞼<sup>たやっ</sup>に<sup>は</sup>窺<sup>のぞ</sup>は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九の<sup>ひと</sup>人<sup>がら</sup>品<sup>な</sup>な兄<sup>あ</sup>哥<sup>にい</sup>である。

「へへへへ、いや、どうもな、」

と亭主は前へ出て、<sup>もみで</sup>揉<sup>も</sup>手をしながら、

「しかし、このお天気続きで、まず結構でござりやすよ。」と何も無い、<sup>すす</sup>煤<sup>すす</sup>けた天井を仰ぎ仰ぎ、帳場の上の神棚へ目を外<sup>そ</sup>らす。

「お師匠さん、」

女房前垂をちよつと撫<sup>な</sup>でて、

「お銚<sup>ちようし</sup>子<sup>こ</sup>でございますかい。」と莞<sup>にっこり</sup>爾<sup>り</sup>する。

門附は手拭の上へ撥<sup>ぼ</sup>を置いて、腰へ三味線を小取廻<sup>ことりまわ</sup>し、内端<sup>うちわ</sup>に片膝を上げながら、床几の上に素足の胡坐<sup>あぐら</sup>。

ト裾<sup>すそ</sup>を一つ搔<sup>か</sup>込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「ええ、もう飛切りのをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩<sup>よこある</sup>行き。左側の畳に据えた火鉢の中を、邪険に火箸<sup>ひばし</sup>で搔<sup>か</sup>い掘<sup>ほ</sup>つて、赫<sup>かつ</sup>と赤くなつた処を、床几の門附へずいと寄せ、

「さあ、まあ、お当りなさりました。」

「難<sup>ありがて</sup>有え、」

と鉄拐<sup>てつか</sup>に褌<sup>つま</sup>へ引挟<sup>ひっばさ</sup>んで、ほうと呼吸<sup>いき</sup>を一つ長く吐<sup>つ</sup>いた。

「世の中<sup>よ</sup>にや、こんな炭火<sup>すす</sup>があると思<sup>おも</sup>うと、里心<sup>さとこころ</sup>が付<sup>つ</sup>いてなお寒い。堪<sup>たま</sup>らねえ。女房<sup>おかみ</sup>さん、銚子<sup>ちやうし</sup>をどうかね、ヤケという熱爛<sup>あつかん</sup>にしておくんなさい。ちつと飲<sup>の</sup>んで、うんと酔<sup>よ</sup>おうという、卑劣<sup>ひりやう</sup>な癖<sup>くせ</sup>が付<sup>つ</sup>いてるんだ、お察<sup>さつ</sup>しものですぜ、ええ、親方<sup>おんかた</sup>。」

「へへへ、お方<sup>かた</sup>、それ極<sup>ごく</sup>熱<sup>あつ</sup>じや。」

女房<sup>おんな</sup>は染<sup>ぞ</sup>めた前歯<sup>まへば</sup>を美<sup>う</sup>しく、

「あいあい。」

#### 四

「時に何かね、今<sup>いま</sup>此家<sup>こゝ</sup>の前<sup>まへ</sup>を車<sup>くるま</sup>が二台<sup>にだい</sup>、旅<sup>たび</sup>の人<sup>ひと</sup>を乗<sup>の</sup>せて駈<sup>かけぬ</sup>抜<sup>ぬ</sup>けたつけ、この町<sup>まち</sup>を、……」  
と干<sup>ちよく</sup>した猪口<sup>ちよく</sup>で門<sup>かど</sup>を指<sup>さ</sup>して、

「二三町<sup>にさんちやう</sup>行<sup>い</sup>つた処<sup>ところ</sup>で、左側<sup>ひだりがは</sup>の、屋根<sup>やね</sup>の大き<sup>おほ</sup>きそうな家<sup>いへ</sup>へ着<sup>き</sup>けたのが、蒼<sup>あお</sup>く月<sup>つき</sup>明<sup>あ</sup>りに見<sup>み</sup>えたが

ね、……あすこは何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でございませ、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。この土地じや、まああすこ一軒でござりますよ。古い家じやが名代で。前には大きな女郎屋じやつたのが、旅籠屋になつたがな、部屋々々も昔風そのままな家じやに、奥座敷の欄干の外が、海と一所の、大い掛斐の川口じや。白帆の船も通りますわ。鱸は刎ねる、鰯は飛ぶ。とんと類のない趣のある家じや。ところが、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、板廊下や厠に点いた燈を消して、悪戯をするげに言います。が、別に可恐い化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩きをして見せる。……時雨れた夜さりは、天保銭一つ使賃で、豆腐を買いに行くと言う。それも旅の衆の愛嬌じや言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、この土地はまだ何も知りなさらんかい。」

「あい、昨夜初めてこつちへ流込んで来たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜も闇の烏さね。」

と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣つたり！ ほつ、」

と言つて、目を擦つて面を背けた。

「利く、利く。……恐しい利く唐辛子だ。こう、親方の前だがね、ついこないだもこの手を食つたよ、料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だろう。利くものか、と高を括つて、お銭は要らない薬味なり、どしこと井へぶちまけて、松坂で飛上つた。……また遣つたさ、色気は無えね、涙と涎が一時だ。」と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかわり目を、ト掌で爛を当つた。

「お師匠さん、あんたは東の方ですなあ。」

「そうさ、生は東だが、身上は北山さね。」と言う時、徳利の底を振つて、垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさろうと言うのかな。」

それだ、と門口で断らりよう、と亭主はその段含ませたそんな気の可い顔色。

「御串戯もんですぜ、泊りは木賃と極つていまさ。莫座と笠と草鞋が留守居。壁の破れた処から、鼠が首を長くして、私の帰るのを待っている。四五日はこの桑名へ御厄介になろうと思う。……上旅籠の湊屋で泊めてくれそうな御人品なら、御当家へ、一夜の御無心申したいね、どんなもんです、女房さん。」

「こんなでよくば、泊めますわ。」

と身軽に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動かし、

「滅相な。」と帳場を背負つて、立塞がる体に腰を掛けた。いや、この時まで、紺の鯉いぐち口に手首を縮めて、案山子のごとく立ったりける。

「はははは、お言葉には及びません、鯺鮓屋さんで泊めるものは、醬油おしたじの雨宿りか、鯉か節つおぶしの行者だろう。」

と呵々と一人で笑った。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんなさいまし。」と女房は市松の畳の端から、薄く腰を掛込んで、土間を切つて、差向いに銚子を取った。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「いえな、内じや芸妓屋さんへ出前ばかりが主ですから、ごらんの通りゆっくりじやえな。ほんにお師匠さん佳いお声ですな。なあ、良人。」と、横顔で亭主を流眇ながしめ。

「さよじや。」

とばかりで、煙草たばこを、ぱっぱつ。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたればな、……私や、ほんに、身に染みて、



ぶるぶると震えました。」

五

「そう讚められちやお座が醒める、酔も醒めそう遣瀬がない。たかが大道芸人さ。」  
と兄哥は照れた風で腕組みした。

「私がお世辞を言うものですか、真実ですえ。あの、その、なあ、悚然とするような、恍惚するような、緊めたような、投げたような、緩めたような、まあ、何んと言うて可からうやら。海の中に柳があつたら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいような、…何んとも言いような心持になつたのですえ。」

と、脊筋を曲つて、肩を入れる。

「お方、お方。」

と急込んで、訳もない事に不機嫌な御亭が呼ばれる。

「何じやいし。」と振向くと、……亭主いつの間にか、神棚の下に、斜と構えて、帳面を引繰つて、苦く睨み、

「升屋ますやが懸かけはまだ寄越よこさんかい。」

と算盤そろばんを、ぱちりぱちり。

「今時いまときどうしたえ、三十日みそかでもありませんに。……お師匠ししやうさん。」

「師匠ししやうじゃないわ、升屋ますやが懸かけじやい。」

「そないに急に気きになるなら、良人あんた、ちやと行いつて取とつて来きい。」

と下唇はねちようしの勿調子はねちようし。亭主ていしゆぎやふんと参まつた体ていで、

「二進にしんが一進いちしん、二進にしんが一進いちしん、二天作にいてんさくの五ご、五一ごいち三さん六ろく七しち八ぱち九く。」と、饅頭まんとうの帳ちやうの伸の

縮びちぢみは、加減さしひきだけで済すむものを、醬油しやうじゆに水みづを割算段わしさんだん。

と釜かまの湯気ゆけの白しろけた処ところへ、星ほしの凍こてそうな按摩あんまの笛ふえ。月天心つきてんしんの冬ふゆの町まちに、あたかもこ

れ凧こがらしを吹込ふむ声こゑす。

門附かどづの兄哥あにいは、ふと瘦やせた肩かたを抱かかいて、

「ああ、霜しもに響こく。」……と言いつた声こゑが、物語ものがたりを読よむように、朗ほがらに冴さえて、且かつつ、鋭とく聞き

えた。

「按摩あんまが通とる……女房おかみさん、」

「ええ、笛ふえを吹ふいてですな。」

「畜生、怪しからず身に染みる、堪らなく寒いものだ。」

と割膝に跪坐かしくまして、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗に傾け、ぎぶりと土間へ、  
 「一ツこいつへ注いでおくんな、その方がお前さんも手数たずねが要らない。」

「何んの、私はちつとも構うことないのですえ。」

「いや、御深切は難有ありがたいが、葉罐やかんの底へ消炭けしずみで、湧くあとから醒める処へ、氷で咽喉のどを  
 挟えぐられそうな、あのパイパイを聞かされちや、身体からだにひびつ裂たけがはいりそうだ。……持っ  
 て来な。」

と手を振るばかりに、一息にぐつと呷あおった。

「あれ、お見事。」

と目を睜みはつて、

「まあな、だけれどな、無理酒おいしいなえ。沢山たんと、あの、心配する方があるのですやろ。」

「お方、八百屋の勘定は。」

と亭主まはた瞬きして頤あごを出す。女房は面白半分、見返りもしないで、

「取りに来たらお払いやすな。」

「ええ……と三百は三銭かい。」

で、算盤を空に弾く。

「女房さん。」

と呼んだ門附の声が沈んだ。

「何んです。」

「立続けにもう一つ。そして後を直ぐ、合点かね。」

「あい。合点でございませうが、あんた、豪い大酒ですな。」

「せめて酒でも参らずば。」

と陽気な声を出しかけたが、つと仰向いて眦を上げた。

「あれ、また来たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。……ヤ、そんなにまだ夜は更けまいのに、屋根越の町一つ、こう……田圃の畔かとも思う処でも吹いていら。」

と身忙しそうに片膝立てて、当所なく睜しながら、

「音は同じだが音が違う……女房さん、どれが、どんな顔の按摩だね。」

と聞く。……その時、白眼の座頭の首が、月に蒼ざめて覗きそうに、屋の棟を高く

見た……目が鋭い。

「あれ、あんた、鹿の雌雄ではあるまいし、笛の音で按摩の容子は分りませぬもの。」

「まつたくだ。」

と寂しく笑つた、なみなみ注いだる茶碗の酒を、屹と見ながら、

「杯の月を酌もうよ、座頭殿。」と差俯いて独言した。……が博多節の文句か、

知らず、陰々として物寂しい、表の障子も裏透くばかり、霜の月の影冴えて、辻に、町に、按摩の笛、そのあるものは波に響く。

## 六

「や、按摩どのか。何んだ、唐突に驚かせる。……要らんよ。要りませぬ。」

と弥次郎兵衛。湊屋の奥座敷、これが上段の間とも見える、次に六畳の附いた中古の十畳。障子の背後は直ぐに縁、欄干にずらりと硝子戸の外は、水煙渺として、曇らぬ空に雲かと見る、長洲の端に星一つ、水に近く晃らめいた、揖斐川の流れの裾は、潮を籠めた霧白く、月にも苦を伏せ、蓑を乾す、繫船の帆柱がすすくと垣根に近い。そこに燭台を傍にして、火桶に手を懸け、怪訝な顔して、

「はて、お早いお着きお草臥れ様で、と茶を一つ持つて出て、年増の女中が、唯今引込

んだばかりの処。これから膳にもしよう、酒にもしようと思うちよつとの隙間へ、のそりと出した、あの面はえ？……

この方、あの年増めを見送つて、入交つて来るは若いのか、と前髪の正面でも見ようと思えば、霜げた冬瓜に草鞋を打着けた、という異体な面を、襖の影から斜に出して、（按摩でやす。）とまた、悪く抜衣紋で、胸を折つて、横坐りに、蟬燭火へ紙火屋のかかつた灯の向うへ、ぬいと半身で出た工合が、見越入道の御館へ、目見得の雪女郎を連れて出た、化の慶庵と言う体だ。

要らぬと言えば、黙然で、腰から前へ、板廊下の暗い方へ、スーと消えたり……怨敵、退散。」

と苦笑いして、……床の正面に火桶を抱えた、法然天窓の、連の、その爺様を見遣つて、

「捻平さん、お互に年は取りたくないでね。ちと三絃でも、とあるべき処を、お膳の前に按摩が出ますよ。……見くびつたものではないか。」

「とかく、その年効いもなく、旅籠屋の式台口から、何んと、事も慇懃に出迎えた、家の隠居らしい切髪の婆様をじろりと見て、

(ヤヤ、難<sup>ありがた</sup>有<sup>た</sup>い、仏壇の中に美婦<sup>たば</sup>が見えるわ、簀<sup>す</sup>の子の天井から落ち度<sup>た</sup>い。)などと、膝栗毛の書拔きを遣らっしやるで魔<sup>ま</sup>が魅<sup>さ</sup>すのじや、屋台は古いわ、造りも広<sup>ひろ</sup>大<sup>だい</sup>。」

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料<sup>はか</sup>られぬ。燈<sup>あかり</sup>も暗いわ、獺<sup>かわうそ</sup>も出ようず。ちと懲<sup>こ</sup>りさっしやるが可<sup>い</sup>い。」

「さん候<sup>ぞうろう</sup>、これに懲<sup>こ</sup>りぬ事なし。」

と奥歯のあたりを膨らまして微笑<sup>ほほえ</sup>みながら、両手を懐に、胸を拡<sup>ふ</sup>く、襖<sup>ふすま</sup>の上なる額を讀む。題<sup>い</sup>して曰<sup>いわ</sup>く、臨風<sup>りんふう</sup>榜<sup>ぼう</sup>可<sup>か</sup>小<sup>しょう</sup>楼<sup>ろう</sup>。

「……とある、いかさまな。」

「床に活<sup>い</sup>けたは、白の小菊<sup>ひく</sup>じや、一<sup>ひと</sup>束<sup>たば</sup>にして掴<sup>つか</sup>みぎし、喝<sup>お</sup>采<sup>お</sup>。」と讚<sup>ほ</sup>める。

「いや、翁<sup>おきな</sup>寂<sup>さび</sup>びた事を言うわ。」

「それぞれ、たつたいま懲<sup>こ</sup>りると言うた口の下から、何んじや、それは。やあ、見やれ、其許<sup>そこ</sup>の袖口から、茶色の手の、もそもそとした奴<sup>やつ</sup>が、ぶらりと出たわ、揖<sup>い</sup>斐<sup>ひ</sup>川の獺<sup>かわうそ</sup>の。」

「ほい、」

と視<sup>なが</sup>めて、

「南無三宝。」と慌しく引込める。

「何んじゃそれは。」

「ははははは、拙者うまれつき粗忽にいたして、よくものを落す処から、内の婆どのが計略で、手袋を、ソレ、ト左右糸で繋いだものさね。袖から胸へ潜らして、ずいと引張つて両手へ嵌めるだ。何んと恐しかろう。捻平さん、かくまで身上を思うてくれる婆どのに對しても、無駄な祝儀は出せませんな。ああ、南無阿弥陀仏。」

「狸めが。」

と背を円くして横を向く。

「それ、年増が来る。秘すべし、秘すべし。」

で、手袋をたくし込む。

処へ女中が手を支いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、やつと、今草鞋を解いたばかりだ。泊めてもらうから、支度はしません。」と真面目に言う。

色は浅黒いが容子の可い、その年増の女中が、これには妙な顔をして、



「へい、御飯は召あがりますか。」

「まず酒から飲みます。」

「あの、めしあがりますものは？」

「姉さん、ここは約束通り、焼蛤やきはまぐりが名物だの。」

七

「そのな、焼蛤は、今も町はずれの葦簀よしずばり張なんぞでいただきます。やつぱり松毬まつかさで焼きませぬと美味おいしうござりませんで、当家うちでは蒸したのを差上げます、味淋みりん入れて味美あじよう蒸します。」

「ははあ、栄螺さざえの壺焼つぼやきといった形、大道店で遣りますな。……松並木を向うに見て、松毬まつかさのちよろちよろ火、蛤の煙がこの月夜に立とうなら、とんと竜宮の田楽でんがくで、乙姫おとひめさま様が洒落しやれに姉さんあねかぶりを遊ばそうという処、また一段の趣おもむきだろうが、わざとそれがために忍んでも出られまい。……当家ここの味淋蒸、それが好よかろう。」

と小父おじご者納得した顔して頷うなずく。

「では、蛤でめしあがりますか。」

「何？」と、わざとらしく耳を出す。

「あのな、蛤であがりますか。」

「いや、箸で食いやしよう、はははは。」

と独ひとりで笑つて、懐中から膝栗毛の五編を一冊、ポンと出して、

「難ありがた有いい。」と額を叩く。

女中も思わず噴飯ふきだして、

「あれ、あなたは弥次郎兵衛様でございますな。」

「その通り。……この度の参宮には、都合あつて五二館と云うのへ泊つたが、内宮ないぐうさま様へ

参る途中、古市ふるいちの旅籠屋、藤屋の前を通つた時は、前度いかい世話になつた気で、薄暗

いまで奥深いあの店頭みせさきに、真鍮しんちゆうの獅噛火鉢しかみひばちがぴかぴかとあるのを見て、略儀ながら、

車の上から、帽子を脱いでお辞儀をして来た。が、町が狭いので、向う側の茶店の新姐しんぞに、

この小兀すこはげを見せるのが辛かつたよ。」

と燈あかりに向けて、てらりと光らす。

「ほほ、ほほ。」

「あはは。」

で捻平も打笑うと、……この機会に誘われたか、——先刻二人が着いた頃には、三味線太鼓で、トトン、ジャカジャカじやじやんと沸返るばかりだった——ちようど八ツ橋形に歩行板が架つて、土間を隔てた隣の座敷に、およそ十四五人の同勢で、女交りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、大河の汐に引かれたらしく、ひとしきりひとけはい、人気勢が、遠くへ裾拡がりに茫と退いて、寂とした。ただだっ広い中を、猿が鳴きながら走廻るように、キヤキヤとする雛妓の甲走った声が聞えて、重く、ずつしりと、覆かぶさる風に、何を話すともなく多人数の物音のしていたのが、この時、洞穴から風が抜けたように哄と動揺めく。

女中も笑い引きに、すつと立つ。

「いや、この方は陰々としている。」

「その方が無事で可いの。」

と捻平は火桶の上へ脊くぐまつて、そこへ投出した膝栗毛を差覗き、

「しかし思いつきじゃ、私はどうもこの寝つきが悪いで、今夜は一つ枕許の行燈で読んでみましょう。」

「止よしなさい、これを読むと胸せまが切きつて、なお目が冴さえて寝よられなくなります。」

「何を言いわつしやる、当あて事もことない、膝栗毛せきりぼを見て泣なくものがあるうかい。私わしが事ことを言いわつしやる、其許そこがよつほど捻平ねいへいじゃ。」

と言う処ところへ、以前の年増としぞうに、小女こおんながついて出て、膳ぜんと銚子しやうしを揃そろえて運はんだ。

「蛤かきは直じきに出来こえます。」

「可よし、可よし。」

「何なによりも酒さけの事こと。」

捻平ねいへいも、猪口ちよこを急いそぐ。

「さて汝てめえにも一つ遣つかろう。爛かんの可かい処ところを一杯遣つからつし。」と、弥次郎兵衛やじらべゑ、酒飲さけのみの癖くせで、ちとぶるぶるする手に一杯傾かたけた猪口ちよこを、膳ぜんの外ほかへ、その膝栗毛せきりぼの本もとの傍わきへ、畳たたみの上うへにちやんと置いて、

「姉あねさん、一つ酌しやくいでやつてくれ。」

と真顔まへんで言いう。

小女こおんなが、きよとんとした顔かほを見ると、捻平ねいへいに追おつかかけの酌しやくをしていた年増としぞうが見向みむかいて、

「喜野きのの、お酌しやくぎ……その旦那だんなはな、弥次郎兵衛やじらべゑ様さまじゃで、喜多八きだはちさんにお杯さかづきを上げなさる

んや。」

と早や心得たものである。

八

小父者おじごはなぜか調子を沈めて、

「ああ、よく言つた。俺おれを弥次郎兵衛は難有ありがたい。居心いごころは可よし、酒は可。これで喜多八さえ一所だつたら、膝栗毛しろうを正しょうのもので、太平の民となる処を、さて、杯をさしたばかりで、こう酌ついだ酒へ、蠟燭ろうそくの灯ひのちらちらと映る処は、どうやら餓鬼たむに手向けたようだ。あのまた馬鹿野郎はどうしている——」と膝に手を支つき、畳の杯しづを凝じつと見て、陰気な顔する。捻平ねいへいも、ふと、この時横を向いて腕組した。

「旦那、その喜多八さんを何んでお連れなさりませんね。」

と愛嬌あいぎょう造つくつて女中は笑う。弥次郎やじらう寂さみしく打笑み、

「むむ、そりゃ何よ、その本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。いい年をして娑婆しやば気けな、酒も飲めば巫山ふざけ戯げもするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒いにつけ、

杖柱つえとも思う同伴つれの若いものに別れると、六十の迷児まいごになつて、もし、この辺に棚からぶら下がつたような宿屋はござりませんか、賑にぎやかな町の中を独りどぼとぼと尋ね飽倦あぐんで、もう落胆がっかりしやした、と云つてな、どつかり知らぬ家の店頭みせさきへ腰を落込おとしこんで、一服無心をした処……あすこを読むと串戯じょうだんではない。……捻平ねいへいさん、真からもつて涙が出ます。」

と言う、臉まぶたに映つて、蠟燭の火がちらちらとする。

「姉あねや、心しんを切つたり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばたいたが、

「や、あの騒さわぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越どまごしの隣室となりへ傾き、

「豪えらいぞ、金かな盃だらいまで持ち出いたわ、人間は皆裾が天井へ宙乗りして、盃を皿小鉢が躍るそうな。おおお、三味線太鼓が鑓しのぎを削つて打合う様子じゃ。」

「もし、お騒がしゅうござりましょう、お氣の毒でござります。ちようど霜月でな、今年度の新兵さんが入営なさりますで、その送別会じゃ言うて、あっちこっち、皆、この景氣

でござります。でもな、お寝ります時分には時間になるので静まりましよう。どうぞ御辛抱なさいまして。」

「いやいや、それには及ばぬ、それには及ばぬ。」

と小父者、二人の女中の顔へ、等分に手を掉つて、

「かえつて賑かで大に可い。悪く寂寞して、また唐突に按摩に出られては弱るからな。」

「へい、按摩がな。」と何か知らず、女中も読めぬ顔して聞返す。

捻平この話を、打消すように咳して、

「さ、一献参ろう。どうじゃ、こちらへも酌人をちと頼んで、……ええ、それ何んとか言うの。……桑名の殿様時雨でお茶漬……とか言う、土地の唄でも聞こうではないかの。陽気にな、かつと一つ。旅の恥は掻棄てじゃ。主はソレ叱言のような勸進帳でも遣らっしゃい。」

染めようにも髯は無いで、私はこれ、手拭でも畳んで法然天窓へ載せようでの。」と捻平が坐りながら腰を伸して高く居直る。と弥次郎眼を睜つて、

「や、平家以来の謀叛、其許の発議は珍らしい、二方荒神鞍なしで、真中へ乗りやし

よう。」

と夥おびただしく景氣を直して、

「姉あんなえ、何んでも構わん、四五人木遣きやりで曳ひいて来い。」

と肩を張つて大きに力む。

女中酌の手を差控えて、銚子を、膝に、と真直まっすぐに立てながら、

「さあ、今あつちの座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、芸妓げいこさんはあつたかな。」

小女こんなが猪首いくびで領うなずき、

「誰も居やはらぬ言うてでやんした。」

「かいな、旦那さん、お氣の毒さまでござります。狭い土地に、数のない芸妓げいこやによつて、こうして会たてなんぞ立込みますと、目星めほしい妓こたちは、ちやつとの間みんなに皆出払います。そうか言うて、東京のお客様に、あんまりな人も見せられはしませずな、容色きりようが好いいとか、芸がたぎつたとかいうのでござりませぬとなあ……」

「いや、こうなつては、宿賃を払わずに、こちとら夜遁よにげをするまでも、三味線を聞かなきゃ納まらぬ。眇めっかち、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」



「待ちなさりました。おお、あの島屋の新妓さんならきつと居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎじゃ、廊下走つて、電話へ掛れや。」

## 九

「持つて来い、さあ、何んだ風車。」

急に勢の可い声を出した、饅飩屋に飲む博多節の兄哥は、霜の上の爛酒で、月あかりに直ぐ醒める、色の白いのもそのままであつたが、二三杯、呷切の茶碗酒で、目の縁へ、颯と酔が出た。

「勝手にパイパイ吹いておれ、でんでん太鼓に笙の笛、こつちあ小児だ、なあ、阿媽。：いや、女房さん、それにしても何かね、御当処は、この桑名と云う所は、按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。

「あんたもな、按摩の目は蠣や云います。名物は蛤じやもの、別に何も、多い訳はないけれど、ここは新地なり、旅籠屋のある町やに因つて、つい、あの衆が、あちこちから稼ぎに来るわな。」

「そうだ、成程新地くるわだった。」となぜか一人で納得して、気の抜けたような片手を支つく。

「お師匠さん、あんた、これからその音声のどを芸妓屋げいこやの門かどで聞かしてお見やす。ほんに、人ひと死としにが出来ようも知れぬぜな。」と襟の処とこで、塗盆ぬりばしをくるりと廻まわす。

「飛んだ合せかがみだね、人死が出来て堪たまるものか。第一、芸妓屋げいしやの前へは、うっかり立てねえ。」

「なぜえ。」

「悪くすると敵かたきに出会でつくわす。」と投首なげくびする。

「あれ、芸が身を助けると言う、……お師匠さん、あんた、芸妓げいこゆえの、お身の上かえ。

……ほんにな、仇かたきだすな。」

「違ちがった！ 芸者の方で、私が敵かたきさ。」

「あれ、のけのけと、あんな憎いこと言いなさんす。」と言う処へ、月は片明りの向う側。狭い町の、ものの氣勢けいはいにも暗い軒下を、からころ、からころ、駒下駄こまげたの音が、土間に浸込しみこむように響いて来る。……と直ぐその足許あしもとを潜くぐるように、按摩の笛が寂しく聞える。

門附かどつきは屹ぎっと見た。

「噂うわさをすれば、芸妓げいこはんが通りまつせ。あんた、見たいなら障子を開けやす……そのかわ

り、敵打たりようと思つてな。」

「ああ、いつでも打たれてやら。ちよつ、可厭いやに煩うるさく笛ふえを吹くない。」  
かたりと門かどの戸かどを外から開ける。

「ええ、吃驚びっくりすら。」

「今晚は、——鯔鈍六ツ急いでな。」と草履ぞうり穿はきの半纏はんてんぎ着、背中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい。」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒つったに突立ち、

「お方、そりや早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい燈あしおと音ねやな、どこの？」と聞く。

「こないだ山田の新町から住替えた、こんの島家の新妓しんこじゃ。」と言いながら、鼻赤の若い衆は、靦のぞいた顔を外に曲げる。

と門附は、背後うしろの壁へ胸を反らして、ちよつと伸上るようにして、戸に立つ男の肩越しに、皎こうとした月の廓くわの、細い通とおりを見透かした。

駒下駄はちと音低く、まだ、からころと響いたのである。

「沢山出なさるかな。」

「まあ、こんの饅飩のようには行かぬで。」

「その気で、すぐに届けますえ。」

「はい頼みます。」と、男は返る。

亭主帳場から背後向きに、日和下駄を探つて下り、がたりびしりと手当り強く、そこへ広蓋を出掛ける。ははあ、夫婦二人のこの店、気の毒千万、御亭が出前持を兼ねると見えたり。

「裏表とも気を注げるじゃ、可いか、可いか。ちよつと道寄りをして来るで、可いか、お方。」

とそこいらじろじろと睨廻して、新地の月に提灯入らず、片手懐にしたなりで、亭主が出前、ヤケにがつと戸を開けた。後を閉めないで、ひよこひよこ出て行く。

釜の湯気が颯と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から来て、

「いつまで、うっかり見送つてじゃ、そんなに敵が打たれたいの。」

「女房さん、桑名じゃあ……芸者の箱屋は按摩かい。」と悚氣としたように肩を細く、こ

の時やつと居直つて、女房を見た、色が悪い。

## 十

「そうさ、いかに伊勢の浜荻はまおぎだつて、按摩の箱屋というのはなかりう。私もなかりうと思うが、今向う側を何んとか屋の新妓しんことか云うのが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、一軒おき二軒おきの、軒行燈のきあんどんでは浅葱あさぎになり、月影では青くなつて、薄い紫の座敷着で、褌つまを蹴出けださず、ひっそりと、白い襟を俯向うつむいて、足の運びも進まないように何んとなく悄しおれて行く。……その後あとから、鼠色の影法師。女の影なら月に地つちを這はう筈はずだに、寒い道陸神どうろくじんが、のそのそと四五尺離れた処を、ずっと前方むこうまで附添ついでつたんだ。腰附、肩附、歩行あるく振、捏でつちて附着くつけたような不恰ぶかつこう好あたまな天窓の工合、どう見ても按摩だね、盲人めくららしい、めんない千鳥よ。……私あ何んだ、だから、按摩が箱屋をすると云つちや可笑おかしい、盲目めくらになつた箱屋かも知れないぜ。」

「どんな風の、どれな。」

と門かどへ出そうにする。

「いや、もう見えない。呼ばれた家へ入ったらしい。二人とも、ずっと前方で居なくなつた。そうか。ああ、盲目の箱屋は居ねえのか。アまた殖えたぜ……影がさす、笛の音に影がさす、按摩の笛が降るようだ。この寒い月に積つたら、桑名の町は針の山になるだろう、堪らねえ。」

とぐいと呷って、

「ええ、ヤケに飲め、一杯どうだ、女房さん附合いねえ。御亭主は留守だが、明放しよ、……構うものか。それ向う三軒の屋根越に、雪坊主のような山の影が覗いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「来た、来た、来た、来やあがつた、来やあがつた、按摩々々、按摩。」

と呼吸も吐かず、続けざまに急込んだ、自分の声に、町の中に、ぬい、と立って、杖を脚許へ斜交いに突張りながら、目を白く仰向いて、月に小鼻を照らされた流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、そのまま凍附くように立留まったのも、門附はよく分らぬ状で、

「影か、影か、阿媽、ほんとの按摩か、影法師か。」

と激しく聞く。

「ほんとなら、どうおしる。貴下、そんなに按摩さんが恋しいかな。」

「恋しいよ！ ああ、」

と呼吸を吐いて、見直して、眉を顰めながら、声高に笑った。

「ははははは、按摩にこがれてこの体さ。おお、按摩さん、按摩さん、さあ入ってくんねえ。」

門附は、撥を除けて、床几を叩いて、

「一つ頼もう。女房さん、済まないがちよいと借りるぜ。」

「この畳へ来て横におなりな。按摩さん、お客だす、あとを閉めておくんなさい。」

「へい。」

コトコトと杖の音。

「ええ……とんと早や、影法師も同然なもので。」と掠れ声を白く出して、黒いけんちゅう羊羹色の被布を着た、燈の影は、赤くその皺の中へさし込んだが、日和下駄から消えなくても失せず、片手を泳ぎ、片手で酒の香を嗅分けるように入った。

「聞えたか。」

とこの門附は、権のあるものいいで、五六本銚子の並んだ、膳をまた傍へずらす。

「へへへ」とちよつと鼻をすすつて、ふん、とけなりそうに香を嗅ぐ。

「待ちこがれたもんだから、戸外を犬が走つても、按摩さんに見えたのさ。こう、悪く言うんじゃないぜ……そこへぬつくりと頭れたろう、酔っている、幻かと思つた。」

「ほんに待兼ねていなさつたえ。あの、笛の音ばかり気にしなさるので、私もどうやら解めなんだが、やつと分つたわな、何んともお待遠でござんしたの。」

「これは、おかみさま、御繁昌。」

「お客はお一人じゃ、ゆつくり療治してあげておくれ。それなりにお寝つたら、お泊め申そう。」

と言う。

按摩どの、けろりとして、

「ええ、その気で、念入りに一ツ、搦りましょうで。」と我が手を握つて、拉ぐように、ぐいと揉んだ。

「へい、旦那。」

「旦那じゃねえ。ものもらいだ。」とまた呷る。

女房が竊と睨んで、



「滅相な、あの、言いなさる。」

十一

「いや、横になるところじゃない、沢山だ、ここで沢山だよ。……第一背中へ掴つかまれて、一呼吸ひといきでも応こたえられるかどうか、実はそれさえ覚おぼ束つかない。悪くすると、そのまま目を眩まわして打倒ぶったおれようも知れんのさ。体ていよく按摩あんまさんに掴み殺ころされるといった形だ。」

と真顔で言う。

「飛んだ事をおつしやりませ、田舎でも、これでも、長年年期を入れました杉山流のものでござります。鳩尾きゅうびに鍼はりをお打たせになりましたも、決して間違まちがいのあるようなものはござりませぬ。」と呆あきれたように、按摩あんまの剥むく目は蒼あおかりけり。

「うまい、まずいを言うのじゃない。いつの幾日いくかにも何なん時ときにも、洒落しゃれにもな、生れてからまだ一度も按摩あんまさんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなにあんた、こがれなさった癖くせに。」

「そりゃ、張はって張はって張はって仕様がないから、目にちらつくほど待まちったがね、いざ……となる

と初産ういぜんです、灸きゆうの皮切も同じ事さ。どうにも勝手が分らない。痛いんだか、痒かゆいんだか、風説うわさに因よると擦くすくつたいとね。多分私も擦くすくつたかろうと思う。……ところがあいにく、母おふく親ろが操正まおとこしく、これでも密夫まおとこの児こじやないそうで、その擦くすくつたがりようこの上なし。

……あれ、あんなあの、握にぎりめし飯こせを拵こえるような手附てづをされる、とその手で揉もまれるかと思つたばかりで、もう堪たまらなく擦くすくつたい。どうも、ああ、こりや不可いけえ。」

と脇腹りょうひじへ両りょう肱ひじを、しつかりついて、搔か竦いむように脊筋せきじんを捻よる。

「ははははは、これはどうも。」と按摩あんまは手持不沙汰てしだな風。

女房更あらためて顔かほを覗のぞいて、

「何んと、まあ、可愛かわいらしい。」

「同じ事を、可哀かわい想そうだ、と言いつてくんねえ。……そうかと言いつて、こう張はつちや、身も皮も石いしになつて固かたりそうな、背せが詰つまつて胸むねは裂ひける……揉もんでもらわなくては遣やり切きれない。遣やりれ、構かまわない。」

と激げきしい声こゑして、片膝かたひざを屹ぎつと立て、

「殺ころす気で蒐かれ。こつちは覺悟かくごだ、さあ。ときに女房おかみさん、袖摺そでずり合あうのも他た生しょうの縁えんツさ。旅空掛りぞけてこつしたお世話せわを受けるのも前まへの世よの何なにかだらう、何なにんだか、おなごりが

惜おしいんです。掴つか殺ころされりやそれきりだ、も一つ憚はばりだがついでおくれ、別れの杯はになろうも知れん。」

と雫しずくを切つて、ついと出すと、他愛なさもあんまりな、目の色の変りよう、眦まなじりも屹きつとなつたれば、女房は氣を打たれ、默だんまり然でただ目を睜みはる。

「さあ按摩さん。」

「ええ、」

「女房おかみさん酌ついどくれよ！」

「はあ、」と酌をする手がちと震えた。

この茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一緒であつた。

がたがたと身震いしたが、面おもては幸さいわいに紅潮して、

「ああ、腸はらわたへ沁しみ透とおる！」

「何かその、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」と、これもおどつく。

「まず、」

と突張つっぱつた手をぐたりと緩めて、

「生命いのちに別条は無さそうだ、しかし、しかしこた応たえる。」

とがつくり俯向いたのが、ふらふらした。

「月は寒し、炎のようなその指が、火水となつて骨に響く。胸は冷い、耳は熱い。肉は燃える、血は冷える。あつ、」と言つて、両手を落した。

吃驚して按摩が手を引く、その嘴や鰓に似たり。

兄哥は、しつかり起直つて、

「いや、手をやすめず遣つてくれ、あわれと思つて静に……よしんば徐と揉まれた処で、私は五体が碎ける思いだ。

その思いをするのが可厭さに、いろいろに悩んだんだが、避ければ摺着く、過ぎれば引張る、逃げれば追う。形が無ければ声がする……パイパイ笛は攻太鼓だ。こうひしひしと寄着かれちや、弱いものには我慢が出来ない。淵に臨んで、畦の上に瞰下ろして踏留まる胆玉のないものは、いつその思い、真逆に飛込みます。破れかぶれよ、按摩さん、従兄弟再従兄弟か、伯父甥か、親類なら、さあ、敵を取れ。私はね、……お仲間の按摩を一人殺しているんだ。」

「今からちやうど三年前。……その年は、この月から一月後の師走しわすの末に、名古屋へ用があつて来た。ついでと言つては悪いけれど、稼かせぎの繰廻ぐるしがどうか附ついて、参宮が出来るといふのも、お伊勢様の思おも召めし、冥加みょうがのほど難有ありがたい。ゆつくり古市ふるいちに逗留とうりゆうして、それこそついにて、……浅熊山あさまやまの雲も見よう、鼓ヶ嶽たけしらべの調も聞こう。二見ふたみじや初日を拝ひよりやまんで、堺橋さかいばしから、池の浦、沖の島で空が別れる、上郡かみごおりから志摩へ入つて、日和山ひよりやまを見物する。……海が凪ないだら船を出して、伊良子ヶ崎いらこの海鼠なまこで飲もう、何でも五日六日は逗留とまりといふつもりで。……山田では尾上町の藤屋へ泊つた。驚くべからず——まさかその時は私わたしだつて、浴衣あわせに袷あはせ居いやしな。

着換まかえに紋付もんつきの一枚も持もつた、縞しまで襲衣かさねの若旦那わかしらさ。……ま、こう、雲助けいせいが傾城買けいせいがいの昔むかしを語る……；負惜まけおしみを言うのじやないよ。何も自分の働はたらきでそうした訳わけじやないのだから。——聞きねえ、親おやなり、叔父おじなり、師匠ししやうなり、恩人おんじんなりという、……私わたしが稼業かせぎじや江戸えどで一番いちばん、日本中にっぽんぢゆうの家元いえもとの大黒柱だいこくちゆうと云う、少すこ元げんの苦くるい面つらした阿父おやじがある。

いや、その顔色かほいろに似合にあわな、気きさくに巫山戯ふざけた江戸児えどこでね。行年ぎやうねんその時六十歳ろくじゅうさいを、三つと刻くんだはおかしいが、数え年かぞへねんのサバを算よんで、私わたしが代理だいりに宿帳しゆくちやうをつける時は、

天地人とか何んとか言つて、禪ぜんの問答をするように、指を三本、ひよいと出してギロリと睨にらむ……五十七歳とかけと云うのさ。可いいかね、その気だもの……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、阿父おとつさんが大の禁句さ。……与一兵衛じゃあるめえし、汝てめえ、定九郎のように呼ぶなえ、と唇を捻曲ねじまげて、叔父さんとも言わせねえ、兄さんと呼べ、との御意だぬ。

この叔父さんのお供だろう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は続く。どこへ行つても女はふらない。師走の山路に、嫁菜が盛りで、しかも大輪おおりんが咲いていた。

とこの桑名、四日市、亀山と、伊勢路へ掛かかつた汽車の中から、おなじ切符のたれかれが——その催もよおしについて名古屋へ行つた、私たちの、まあ……興行か……その興行の風説うわさをする。嘘にもどうやら、私の評判も可よさそうな。叔父はもとより。……何事も言うには及ばん。——私が口で饒舌しゃべつては、流儀の恥になろうから、まあ、何某なにがしと言つたばかりで、世間は承知すると思つて、聞きねえ。

ところがね、その私たちの事を言うついでに、この伊勢へ入つてから、きつと一所に出る、人の名がある。可いいかい、山田の古市に惣市そういちと云う按摩鍼あんまはりだ。」

門附はその名を言う時、うつとりと瞳を据えた。背せなかいだを抱くように背後うしろに立つた按摩にも、

床几しょうぎに近く裾を投げて、向うに腰を掛けた女房にも、目もくれず、凝じつと天井を仰ぎながら、胸前むなさきにかかる湯気を忘れたように手で捌さばいて、

「按摩だ、がその按摩が、旧もとはさる大名に仕えた士族の果はてで、聞きねえ。私等が流儀と、おなじその道の芸の上手。江戸の宗家も、本山も、当国古市において、一人で兼ねたり、という勢いきおいで、自ら宗山そうざんと名告る天狗てんぐ。高慢も高慢だが、また出来る事も出来る。……東京の本場から、誰も来て怯おびかされた。某それがしも参つて拉ひがれた。あれで一眼でも有ろうなら、三重県しろうものに居る代物ではない。今度名古屋へ来た連中もそうじゃ、贗物にせものではなからうから、何も宗山に稽古をしてもらえとは言わぬけれど、鰻うなぎの他に、鯛たいがある、味を知つて帰れば可いいに。——と才さい発はつけた商人あきんど人風のと、でつぷりした金の入歯いばの、土地の物持とも思われる奴の話したのが、風説うわさの中でも耳に付いた。

叔父はこくこく坐いねむり睡ねむをしていたつけ。私わつしあ若氣だ、襟巻で顔を隠して、睨にらむように二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、わざと、叔父を一人で湯へ遣り……女中にもちよつと聞く。

……挨拶あいさつに出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云う、これこれした芸人が居るか、と聞く、誰の返事も同じ事。思つたよりは高名で、現に、この頃も藤屋に泊つた、何某侯なにがしこう

の御隠居の御召に因つて、かみしも上下で座敷を勤した時、（さてもな、鼓ヶ嶽が近いせい、これほどの松風は、東京でも聞けぬ、）と御賞美。

（てきら的等にも聞かせたい。）と宗山が言われます、とちよろりと饒舌しゃべつた。私わつしが夥間なかまを——  
（的等。）と云う。

的等の一人、かく云う私だ……」

## 十三

「なお聞けば、古市のはずれに、その惣市、小料理屋の店をして、妾めかけの三人もある、大した勢だ、と云うだろう。——何を！……按摩の分際で、宗家の、宗の字、この道の、本山が凄すさまじい。

こう、按摩さん、舞台の差さしは堪か忍にしてくんな。」

と、竊そつと痛いたそうに胸むねを圧おさえた。

「後で、よく気がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、ほんとの猪ししはないとて威張る。……な、宮重大根が日本一なら、蕪かぶの千枚漬も皇国無双で、早く言えば、この桑名



の、焼蛤も三都無類さ。

その気で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若氣の一凶に苛々して、第一その宗山が気に入らない。(的等。)もぐつと癩に障れば、妾三人で赫とした。

維新以来の世がわりに、……一時私等の稼業がすたれて、夥間が食うに困ったと思え。

弓矢取つては一万石、大名株の芸人が、イヤ楊枝を削る、かるめら焼を露店で売る。……蕎麦屋の出前持になるのもあり、現在私がその小父者などは、田舎の役場に小使いをして、濁り酒のかすに酔つて、田圃の畝に寝たもんです。……

その妹だね、可いかい、私の阿母が、振袖の年頃を、困る処へ附込んで、小金を溜めた按摩めが、ちとばかりの貸を枷に、妾にしよう、と追ひ廻わす。——危く駒下駄を踏返して、駕籠でなくつちや見なかつた隅田川へ落ちようとしたっさ。——その話にでも嫌いな按摩が。

ええ。

待て、見えない両眼で、汝が身の程を明く見るよう、療治を一つしてくりよう。

で、翌日は謹んで、参拝した。

その尊さに、その晩ばかりはちつとの酒で宵寝をした、叔父の夜具の裾を叩いて、枕

許へ水を置き、

(女中、そこいらへ見物に、)

と言つた心は、穴を圧えて、宗山を退治る料簡。

と出た、風が荒い。荒いがこの風、五十鈴川で劃られて、宇治橋の向うまでは吹くまいが、相の山の長坂を下から哄と吹上げる……これが悪く生温くつて、灯の前じゃ砂が黄色い。月は雲の底に淀りしている。神路山の樹は蒼くても、二見の波は白かろう。酷い勢、ぱつと吹くので、たじたじとなる。帽子が飛ぶから、そのまま、藤屋が店へ投返した……と脊筋へ孕んで、坊さんが忍ぶように羽織の袖が飜々する。着換えるのも面倒で、昼間のなりで、神詣での紋付き。——袖畳みに懐中へ捻込んで、何の洒落にか、手拭で頬被りをしたもんです。

門附になる前兆さ、状を見やがれ。」と片手を袖へ、二の腕深く突込んだ。片手で狙うように茶碗を圧えて、

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに寂然している。……軒が、がたぴしと鳴つて、軒行燈がぼつぼつ揺れる。三味線の音もしたけれど、吹さらわれて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶようさ。何の事はない、今夜のこの寂しい新地へ、風を持って来て、打着けたと思え

ば可い。

一軒、地のちと窪んだ処に、溝板から直ぐに竹の欄干になつて、毛氈の端は刎上り、畳に赤い島が出来て、洋燈は油煙に燻つたが、真白に塗つた姉さんが一人居る、空気銃、吹矢の店へ、ひよろりとして引掛つたね。

取着きに、肱を支いて、怪しく正面に眼の光る、悟つた顔の達磨様と、女の顔とを、七分三分に狙いながら、

(この辺に宗山ツて按摩は居るかい。)とここで実は様子を聞く気さ。押懸けて行こうたつてちつとも勝手が知れないから。

(先生様かね、いらつしやります。)と何と、(的等。)の一人に、先生を、しかも、様づけに呼ぶだろう。

(実は、その人の何を、一つ、聞きたくつて来たんだが、誰が行つても頼まれてくれるだろうか。)と尋ねると、大熨斗を書いた幕の影から、色の蒼い、鬢の乱れた、痩せた中年増が顔を出して、(知己のない、旅の方にはどうか知らぬ、お望なら、内から案内して上げましょうか。)と言う。

茶代を奮発んで、頼むと言つた。

(案内して上げなはれ、可い旦那や、気を付けて、)と目配めくばせをする、……と雑作はない、その塗ったのが、いきなり、欄干またを跨いで出る奴さ。」

## 十四

「両袖で口を塞いで、風の中を俯向うつむいて行く。……その女の案内で、つい向う路地に入る  
と、どこも吹附けるから、戸を鎖さしたが、怪しげな行燈あんどんの煽あおって見える、ごたごたした  
両側の長屋の中に、溝板どぶいたの広い、格子戸造りで、この一軒だけ二階屋。

軒に、御手輕御料理おんりょうりとしたのが、宗山先生の住居すまいだった。

(お客様。)と云う女の送りで、ズツと入る。直ぐその長火鉢を取巻いて、三人ばかり、  
変な女が、立膝やら、横坐りやら、猫板に頬杖やら、料理の方は隙ひまらしい。……上あがり櫃かまち  
の正面が、取着とつきの狭い階子段はしごだんです。

(座敷は二階かい、)と突然いきなり頬ほお被かむりを取って上ろうとすると、風立つので燈あかりを置かな  
い。真暗まつくらだからちよつと待って、と色めいてざわつき出す。とその拍子に風のなぐれで、  
奴等の上の釣洋燈つりランブがぱつと消えた。

そこへ、中仕切なかしきりの障子が、次の室まの燈あかりにほのめいて、二枚見えた。真中まんなかへ、ぱつと映つたのが、大坊主の額の出た、唇おおきの大い影法師。む、宗山め、居るな、と思うと、憎い事には……影法師の、その背中に掴つかまって、坊主を揉もんでるのが華奢きゃしゃらしい島田鬘まげで、この影は、濃く映つた。

火燧マツチ々々、と女どもが云う内に、

(えへん) と咳せきばらいを太くして、大な手で、灰吹を持上げたのが見えて、離れて煙管きせるが映る。

——もう一倍、その時図体が拵おおきがったのは、袖を開いたらしい。此奴こいつ、寝ねん寝ね子の広袖どてらを着ている。

やつと台洋燈を点けて、

(お待遠でした、さあ、)

つて二階へ。吹矢の店から送つて来た女はと、中段からちよつと見ると、両膝をずしりと、そこに居た奴の背後うしろへ火鉢を離れて、俯向うつむいて坐つた。

(あの娘こで可いのかな、他ほかにもござりますよつて。)

と六畳の表座敷で低声で言うんだ。——ははあ、商売も大略あらまし分つた、と思うと、其奴そいつが

(お誂は。)

とおおき  
と大な声。

(あつさりしたものでちよつと一口。そこで……)

実は……御主人の按摩さんの、咽喉のどが一つ聞きたいのだ、と話した。

(咽喉?) ……と其奴がね、異おつさげすに蔑んだ笑い方をしたものです。

(先生様の……でござりまするか、早速そう申しませう。)

で、地獄の手曳てびぎめ、急に衣紋繕えもんづくろいをして下りる。しばらくして上つて来た年紀としの少わかい

十六七が、……こりやどうした、よく言う口だが芥溜はきだめに水仙です、鶴です。帯も襟も唐と

縮緬うちりめんじゃあるが、もみじのように美しい。結綿いいわたのふつくりしたのに、浅葱鹿あさぎかの子の絞し

高ぼだかな手柄を掛けた。やあ、三人あると云う、妾の一人か。おおん神の、お膝ひざもと許で沙汰

の限りな! 宗山坊主の背中を揉んでた島田鬚の影らしい。惜しや、五十鈴川の星と澄ん

だその目許も、鯨なますの鰭ひれで濁ろう、と可哀あわれに思う。この娘が紫の袱紗ふくさに載のせて、薄茶を持っ

て来たんです。

いや、御本山の御見識、その咽喉のどを聞きに来たとなると……客にまず袴はかまを穿はかせる仕向しむけ

をするな、真剣勝負面白い。で、こつちも勢いきおい、懐ふところ中から羽織を出して着直したんだね。

やがて、また持出した、杯さかずきというのが、朱塗に二見ケ浦を金蔴絵きんまきえした、杯台に構えたのは凄すこかろう。

(まず一ツ上つて、こつちへ。)

と按摩の方から、この杯の指図をする。その工合が、謹んで聞け、といった、頗すこぶる権高なもののさ。どかりとそこへ構え込んだ。その容ようす子が膝も腹もずんぐりして、胴どうなか中ほど喉どが太い。耳の傍わきから眉間みけんへ掛けて、小蛇のように筋が畝うねくる。眉が薄く、鼻がひしゃげて、ソレその唇の厚い事、おまけに頬骨がギシと出て、齒を嚙かむとガチガチと鳴りそう。左の一眼べとりと盲しい、右が白しろまなこ眼で、ぐるりと翻かえった、しかも一面、念入の黒痘瘡くろあはただ。

が、争あわれないのは、不具かたわ者の相格そうこう、肩つきばかりは、みじめらしくしよんぼりして、猪いの熊入道くまいりだうもがつくり投首なげくびの抜衣紋ぬきえもんで居たんだよ。」

## 十五

「いえな、何も私が意地悪を言うわけではない。」

と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして——傍に柔かな髪ふっさの房ふたえりした島田びんの鬢びんを重かさそうに差さ俯しうつむ向むく……襟えり足あし白しろく冷ひやたそうに、水みづ紅こう色いろの羽は二ふた重えの、無な地ぢの長なが襦じゆ袢ばんの肩かたがすべつて、寒さむげに脊せ筋すぢの抜ぬけるまで、嫋なよやかに、打うち悄しおれた、残のこりの嫁よめ菜な花なの薄うす紫むらさき、浅あさ葱ぎのように目めに淡あい、藤ふじ色いろ縮ちぢ緬めんの二ふた枚まい着きで、姿すがたの寂さびしい、二十はばかりの若わかい芸げ者しやを流しり盼めに掛かけつ、

「このお座敷まは貰もらうて上げるから、なあ和女あんな、もうちやつと内うちへお去いにや。……島家しまがの、あの三重みへさんやな、和女あんな、お三重みへさん、お帰り！」

と屹ぎつと言う。

「お前まへさんがおいでやで、ようお客おきゃくさんの御機嫌ごきげんを取とつてくれるであらうと、小女こおんなばかり附つけておいて、私が勝手勝手へ立違たがうている中うちや、……勿体むていない、お客おきゃくたちの、お年寄としよなががお気きに入いらぬか、近頃ちかごろ山田やまだから来きた言いうて、こちの私わたしの許とこを見みくびつたか、酌しやくをせい、と仰おほ有あつても、浮うき々うきとした顔かほはせず……三味線さんみせん聞きこうとおおししゃらばば、鼻はなの頭かぶで笑わらうたげな。傍そばに居いた喜野きよが見みかねて、私の袖そでを引ひきに来きた。

先刻さつきから、ああ、こうと、口くちの酸すっぱくなるまで、機嫌きげんを取とるようようにして、私が和女あんなの調子てうしを取とつて、よしこの一いっつ上じやう方ぽう唄うたでも、どうぞ三味線さんみせんの音ねをささしておおくれ。お客おきゃく様さまがお寂さびししげげな、座敷ざしきが浮うかぬ、お見みやんせ、蠟燭ろうそくの灯あかりも白しろけると、頼たのむようようにして聞きかいても、



知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は和女、禁物か。下手や言うて、知らぬ云うて、曲まがりなりにもお座つき一つ弾けぬ芸げいこ妓がどこにある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、そでないか。貴客あなたがたのお人柄を見りや分るに、何で和女、勤める気や。私が済まぬ。さ、お立ち。ええ、私が箱を下げてやるから。」

と優しいのがツンと立つて、襖ふすまぎわ際わに横にした三味線を邪険に取つて、衝つと縦たて様に引立てる。

「ああれ。」

はつと裳もすそを摺すらして、取とり縫すがるように、女中の膝を竊そつと抱き、袖を引き、三味線を引留めた。お三重の姿は崩るるごとく、芍しやくやく薬の花の散るに似て、

「堪忍して下さいまし、堪忍して、堪忍して、」と、呼吸いきの切れる声が湿うるんで、

「お客様にも、このお内へも、な、何で私が失礼しましょう。ほんとに、あの、ほんとに三味線は出来ませんもの、姉さん、」

と言ことばが途絶えた。……

「今しがたも、な、他家よそのお座敷、隅の方に坐っていました。不断ではない、兵隊さんの送別会、大陽気に騒ぐのに、芸のないものは置かん、衣服きものを脱いで踊るんなら可よし、可厭いやな

ら下げると……私一人帰されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷いめに逢いました、え。三味線も弾けず、踊りも出来ぬ、座敷で衣物が脱げないなら、内で脱げ、引剥ぐと、な、帯も何も取られた上、台所で突伏せられて、引窓をわざと開けた、寒いお月様のさす影で、恥かしいなあ、柄杓で水を立続けて乳へも胸へもかけられましたの。

こちらから、あの、お座敷を掛けて下さいますと、どうでしょう、炬燵で温めた襦袢を着せて、東京のお客じやそうなど、な、取って置きを着物を出して、よう勤めて帰れや言うて、御主人が手で、駒下駄まで出すんです。

勤めるたつて、どうしましょう……踊は立つて歩行くことも出来ませんし、三味線は、それが姉さん、手を当てれば誰にだつて、音のせぬ事はないけれど、弾いて聞かせとおっしゃるもの、どうして私唄えます。……

不具でもないに情ない。調子が自分で出来ません。何をどうして、お座敷へ置いて頂けようと思ひますと、気が怯けて気が怯けて、口も満足利けませんから、何が気に入らないで、失礼な顔をする、お思ひ遊ばすのも無理はない、なあ。……

このお家へは、お台所で、洗い物のお手伝をいたします。姉さん、え、姉さん。「と袖を擦つて、一生懸命、うるんだ目許を見得もなく、仰向けになつて女中の顔。……

色が見る見る柔やわらいで、突いて立った三味線の棹さおも撓たわみそうになった、と見ると、二人の客へ、向直った、ふつくりとある綾あやの帯の結むすび目で、なおその女中の袂たもとをおさ圧えて。……

## 十六

お三重は、そして、更あらためて二箇ふたりの老人に手を支ついた。

「芸者でお呼び遊あそばした、と思おもいますと……お役に立たたず、極きまりが悪わるうございまして、お銚ちようし子こを持ちますにも手が震ふるえてなりません。下婢おきんをお傍そばへお置おき遊あそばしたとお思おもいなさいます、お休やすみになりますまでお使つかいなすつて下さくださいまし。お背せ中ちゆうを敲たたきましょう、な、どうぞな、お肩かたを揉もまして下さくださいまし。それなら一生懸命いっしやうけんめいにきつと精せいを出だします。」  
と惜おしげ気けもなく、前髪まへかみを畳たたにつくまで平伏ひれふした。三指さんさしづきの折をかがみが、こんな中でも、  
打う上ある。

本ほんを開ひいて、道中みちちゆうの絵えをじろじろと黙もくつて見ていた捻平ねんぺいが、重おもくなるしい口くちを開ひけて、  
「子孫こそん末代まつだいよい意見いけんじゃ、旅りよで芸者げいしやを呼よぶなぞは、のう、お互たがひに以後いご謹じんもう……」と火箸ひしに手てを置おく。

所在なさそうに半眼で、正面に臨風榜可小楼を仰ぎながら、程を忘れた巻、  
この時、口許へ火を吸つて、慌てて灰へ抛つて、弥次郎兵衛は一つ咽せた。

「ええ、いや、女中、……追つて祝儀はする。ここでも思うが、その娘が気が詰ろうから、どこか小座敷へ休まして皆で饅飴でも食べてくれ。私が驕る。で、何か面白い話をして遊ばして、やがて可い時分に帰すが可い。」と冷くなつた猪口を取つて、寂しそうに衝と飲んだ。

女中は、これよりさき、支いて突立つたその三味線を、次の室の暗い方へ密と押遣つて、がつくりと筋が萎えた風に、折重なるまで摺寄りながら、黙然りで、燈の影に水のごとく打揺ぐ、お三重の背中を擦つていた。

「島屋の亭が、そんな酷い事をしおるかえ。可いわ、内の御隠居にそう言うて、沙汰をし上げてよう。心安う思うておいで、ほんにまあ、よう和女、顔へ疵もつけんの。」  
と、かよわい腕を撫下ろす。

「ああ、それも売物じやいうだけの斟酌に違いないな。……お客様に礼言いや。さ、そして、何かを話しがてら、御隠居の炬燵へおいで。切下髪に頭巾被つて、ちようどな、羊羹切つて、茶を食べてや。」

けども、」

とお三重の、その清らかな襟許えりもとから、優しい鬢毛びんのけを差覗さしのぞくように、右瞻左瞻とみこうみで、

「和女あんた、因果やな、ほんとに、三味線は弾けぬかい。ペンともシャンとも。」

で、わざと慰めるように吻々ほほと笑った。

人の情なさけに溶けたと見える……氷る涙の玉を散らして、はっと泣いた声の下で、

「はい、願掛けをしましても、塩断ちまでしましたけれど、どうしても分りません、調子が一つ出来ません。性うまれつき来こでござんしよう。」

師走やみよの闇夜やみよに白梅しらうめの、面おもてを蟬せみに照らされる。

「踊もかい。」

「は……いい、」

「泣くな、弱虫、さあ一つ飲まんか！ 元氣をつけて。向後どこへか呼ばれた時は、怯えおびるなよ。氣の持ちようでもうにもなる。ジャカジャカと引鳴らせ、糸瓜へちまの皮で搔廻かきまわすだ。

琴ことも胡弓こぎゆうも用はない。銅鑼どら鑊くわを叩たたけさ。簫しょうの笛ふえをパイと遣れ、上手下手は誰にも分らぬ。それなら芸なしとは言われまい。踊が出来ずば体操だ。一、」

と左右へ、羽織の紐ひもの断きれるばかり大手を拵かつかつげ、寛濶かんかつな胸を反らすと、

「二よ。」と、庄屋殿が鉄砲二つ、ぬいと前へ突出いて、励ますごとく呵々々と弥次郎兵衛、

「これ、その位な事は出来よう。いや、それも度胸だな。見た処、そのように気が弱くは、いかな事も遣つけられまい、可哀相に。」と声が掠れる。

「あの……私が、自分から、言います事は出来ません、お恥しいのでございますが、舞の真似が少しばかり立てますの、それもただ一ツだけ。」

と云う顔を俯向いて、恥かしそうにまた手を支く。

「舞えるかえ、舞えるのかえ。」

と女中は嬉しそうな声をして、

「おお、踊や言うで明かんのじや。舞えるのなら立つておくれ。このお座敷、遠慮は入らん。待ちなはれ、地が要ろう。これ喜野、あすこの広間へ行つてな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」

とぼんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、名告ったお千が、打傾いて、優しく口許をちよいと曲げて傾いて、

「待つて、待つて、」

## 十七

「いつもと違う。……一度軍隊へ行きなされると、日曜でのうては出られぬ、……お国のためやで、馴なれぬ苦勞もしなさんす。新兵さんの送別会や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。」

可いわ、旅の恥は掻棄てを反あべこべ対なが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を掻廻かまわそう。お三重さん、立つのは何？ 有るものか、無いものか言うも行過ぎた……有るものとして無けれど、どうにか間に合わせたいものではある。」

「あら、姉さん。」

と、三味線取りに立とうとした、お千の膝を、袖でおさ圧えて、ちとはなじろんだ、お三重の愛あいきよう嬌けう。

「糸に合うなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の真似なんです。」と、言いも果てず、お千の膝に顔を隠して、小父者おじごと捻平そかいに背向そかいになった初々しさ。包ましやかな姿ながら、身を揉もむ姿の着崩れして、袖を離れて畳に長い、襦袢の袖は媚なまめかしい。

「何、その舞を舞うのかい。」と弥次郎兵衛は一言云う。

捻平膝の本をばったり伏せて、

「さて、飲もう。手酌でよし。ここで舞などは願ひ下げじや。せめてお題目の太鼓にさっしやい。ふあはははは、」となぜか皺枯れた高笑い、この時ばかり天井に哄と響いた。

「捻平さん、捻さん。」

「おお。」

と不性にやつと応える。

「何も道中の話の種じや、ちよつと見物をしようと思うね。」

「まず、ご免じや。」

「さらば、其許は目を瞑るだ。」

「ええ、縁起の悪い事を言わさる。……明日にも江戸へ帰つて、可愛い孫娘の顔を見るまでは、死んでもなかなか目は瞑らぬ。」

「さてさて捻るわ、ソレそこが捻平さね。勝手になされ。さあ、あの娘立ったり、この爺様に遠慮は入らぬぞ。それ、何にも芸がないと云うて肩腰をさすろうと卑下をする。どんな真似でも一つ遣れば、立派な芸者の面目が立つ。祝儀取るにも心持が可から、



是非見たい。が、しかし心のままにしなよ、決して勤つとめを強つとめいるじやないぞ。」

「あんなに仰おつしや有あつて下さるもの。さあ、どんな事するのや知らんが、まずうても大事な、大事な、それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

とわずかに身を起すと、紫の襟を噛かむように——ふっくりしたのが、あわれに窶やつれた——  
 おどが、頤おど深く、恥かしそうに、内うち懐ぶとこを覗のぞいたが、膚はだ身に着けたと思おもわる、……胸むねやや白しろき衣紋えもんを透かして、濃い紫の細い包、袱紗ふくさの縮ちぢ緬めんが翻ひら然りと翻かえると、燭台に照つて、颯さつと輝く、銀の地の、ああ、白魚しらうおの指に重おもそうな、一本の舞扇。

晃然きらりとあるのを押頂おしくよう、前髪を掛けて、扇をその、玉簪ぎよくさんのごとく額かぶに当てたを、そのまま折目高せまにきりきりと、月の出汐でしおの波の影かげ、静しずかに照てら々と開くとともに、顔を隠して、反さからした指のみ、両方親骨りょうはたけにちらりと白い。

また川口の汐加減しおかげん、隣の広間ひろまの人動揺ひとしよめきが颯さつと退ひく。

と見れば皎こう然ぜんたる銀の地に、黄金の雲を散らして、紺こん青じょうの月、ただ一輪を描いた、扇の影に声澄こゝろみて、

「——その時あま人申もうす様よう、もしこのたまを取と得たらば、この御子みこを世継よつぐの御位みくらい

になしたまえと申しかば、子細あらじと領承したもう、さて我子ゆえに捨ん命、露ほども惜からじと、千尋のなわを腰につけ、もしこの玉をとり得たらば、このなわを動かすべし、その時人々ちからをそえ——」

と調子が緊つて、

「……ひきあげたまえと約束し、一の利剣を抜持つて、」

と扇をきりりと袖を直す、と手練ぞ見ゆる、自から、衣紋の位に年長けて、瞳を定めたその顔。硝子戸越に月さして、霜の川浪照添う。膝立据えた畳にも、燭台の花颯と流るる。

「ああ、待てい。」

と捻平、力の籠つた声を掛けた。

十八

で、火鉢をずっと傍へ引いて、

「女中、もちつとこれへ火をおくれ。いや、立つに及ばん。その、鉄瓶をはずせば可し。」

と捻平がいいつける。

この場合なり、何となく、お千も起居たちいに身体からだが緊しまった。

静しずかに炭火を移させながら、捻平は膝をずらすと、革鞆かばんなどは次の室まへ……それだけ床の間に差置いた……車の上でも頸うなじに掛けた風呂敷包を、重いもののように両手で柔やわらかに取つて、膝の上へ据えながら、お千の顔を除よけて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつつ、

「ああ、これ、お三重さんとか言うの、そのお娘こ、手を上げられい。さ、手を上げて、」  
と言う。……お三重は利剣で立とうとしたのを、慌あわただしく捻平に留められたので、この時

まで、差開いたその舞扇が、唇の花に霞むまで、俯向うつむいた顔をひたと額につけて、片手を畳に支たいていた。こう捻平に声懸けられて、わずかに顔を振上げながら、きりきりと一ま  
ず閉じると、その扇を畳むに連れて、今まで、濶かっと瞳を張つて見据えていた眼まなこを、次第なりに  
塞ふさいだ弥次郎兵衛は、ものも言わず、火鉢のふちに、ぶるぶると震う指を、と支たえた態なりの、  
巻まきたばこ 蓑かさ から、音もしないで、ほろほろと灰がこぼれる。

捻平座蒲団を一膝出ひとひざて、

「いや、更あらためて、熟とくと、見せてもらおうじゃが、まずこつちへ寄らしやれ。ええ、今の謡うたい  
の、氣組みと、その形かた。教えも教えた、さて、習いも習うたの。

こうまでこれを教うるものは、四国の果にも他にはあるまい。あらかた人は分つたが、それとなく音信も聞きたい。の、其許も黙つて聞かつしやい。」

と弥次が方に、捻平目遣いをつつして、

「まず、どうして、誰から、御身は習うたの。」

「はい、」

と弱々と返事した。お三重はもう、他愛なく娘になつて、ほろりとして、

「あの、前刻も申しましたように、不器用も通越した、調子はずれ、その上覚えが悪うござんして、長唄の宵や待ちの三味線のテンもツンも分りません。この間まで居りました、山田の新町の姉さんが、朝と昼と、手隙な時は晩方も、日に三度ずつも、あの囁んで含めて、胸を割つて刻込むように教えて下さつたんでございますけれど、自分でも悲しい。……暁の、とだけ十日かかつて、やつと真似だけ弾けますと、夢になつてもう手が違い、心では思いながら、三の手が一へ滑つて、とぼけたような音がします。

撥で咽喉を引裂かれ、煙管で胸を打たれたのも、糸を切つた数より多い。

それも何も、邪険でするのではないのです。……私が、な、まだその前に、鳥羽の廓に居ました時、……」

「ああ、お前さんは、鳥羽のものかい、志摩だな。」

と弥次郎兵衛がフト聞入れた。

「いえ、私はな、やつぱりお伊勢なんですけれど、父さんが死くなりましてから、継母に売られて行きましたの。はじめに聞いた奉公とは嘘のように違います。——お客の言うことを聞かぬ言うて、陸で悪くば海で稼げって、岨の下の船着から、夜になると、男衆に捉えられて、小船に積まれて海へ出て、月があつても、島の蔭の暗い処を、危いなあ、ひやひやする、木の葉のように浮いて歩行いて、寂とした海の上で……悲しい唄を唄います。そしてお客の取れぬ時は、船頭衆の胸に響いて、女が恋しゆうなる禁厭じゃ、お茶挽いた罰、と云つて、船から海へ、びしやびしやと追下ろして、汐の干た巖へ上げて、巖の裂目へ俯向けに口をつけさして、（こいし、こいし。）と呼ばせます。若い衆は舳に待つて、声が切れると、栄螺の殻をぴしぴしと打着けますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの。……私のそれは、師走から、寒の中で、八百八島あると言う、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巖の角は針のような、あの、その上で、（こいし、こいし。）——唇の、しびれるばかり泣いている。咽喉は裂け、舌は凍って、潮を浴びた裙から冷え通つて、正体がなくなる処を、貝殻で引搔かれて、やつと船で正気が付くのは、灯もな

い、何の船やら、あの、まあ、鬼の支いた棒見るような帆柱の下から、皮の硬い大な手が  
出て、引摺んで抱込みます。

空には蒼い星ばかり、海の水は皆黒い。暗の夜の血の池に落ちたようで、ああ、生きて  
いるか……千鳥も鳴く、私も泣く。……お恥かしゆうござんす。」

と翳す扇の利剣に添えて、水のような袖をあて、顔を隠したその風情。人は声なくして、  
ただ、ちりちりと、蠟燭の涙白く散る。

この物語を聞く人々、いかに日和山の頂より、志摩の島々、海の風、霞の池に鶴の舞う、  
あの、麗朗なる景色を見たるか。

## 十九

「泣いてばかりいますから、気の荒いお船頭が、こんな泣虫を買うほどなら、伊良子崎の  
海鼠を蒲団で、弥島の烏賊を遊ぶつて、どの船からも投出される。

また、あの巖に追上げられて、霜風の間々に、（こいし、こいし。）と泣くのでござ  
んす。

手足は凍つて貝になつても、（こいし）と泣くのが本望な。巖の裂目を沖へ通つて、海の果まで響いて欲しい。もう船も去ね、潮も来い。……そのままで石になつてしまいたいと思ふほど、お客様、私は、あの、」

と乱れた襦袢の袖を銜えた、水紅色映る臉のあたり、ほんのりと薄くして、

「心でばかり長い事、思つております人があつて。……芸も容色もないものが、生意気を云うようですが、……たとい殺されても、死んでもと、心願掛けておりました。

ある晩も、やつぱり蒼い灯の船に買われて、その船頭衆の言う事を肯かなかつたので、こつちの船へ突返されると、艫の処に行火を跨いで、どぶろくを飲んでいた、私を送りの若い衆がな、玉代、だけ損をしやはれ、此方衆の見る前で、この女を、海士にして慰もうと、月の良い晩でした。

胴の間で着物を脱がして、膚の紐へなわを付けて、倒に海の深みへ沈めます。ずんずんずんと沈んでな、もう奈落かと思ふ時、釣瓶のようにきりきりと、身体を車に引上げて、髪の雫も切らせずに、また海へ突込みました。

この時な、その繋り船に、長崎辺の伯父が一人乗込んでいると云うて、お小遣の無心に来て、泊込んでおりました、二見から鳥羽がよいの馬車に、馭者をします、寒中、襦

衣一枚に袴服を穿いた若い人が、私のそんなにされるのが、あんまり可哀相な、とそう云うて、伊勢へ帰って、その話をしましたので、今、あの申しました。……

この間までおりました、古市の新地の姉さんが、随分なお金子を出して、私を連れ出してくれましたの。

それでな、鳥羽の鬼へも面当に、芸をよく覚えて、立派な芸子になれやツて、姉さんが、そうやって、目に涙を一杯ためて、ぴしぴし撥で打ちながら、三味線を教えてくれるんですが、どうした因果か、ちつとも覚えられません。

人さしと、中指と、ちよつとの間を、一日に三度ずつ、一週間も鳴らしますから、近所隣も迷惑して、御飯もままずいと言うのですえ。

また月の良い晩でした。ああ、今の御主人が、親切なだけなお辛い。……何の、身体の切ない、苦しいだけは、生命が絶えればそれで済む。いつそまた鳥羽へ行つて、あの巖に掴まって、（こいし、こいし、）と泣こうか知らぬ、膚の紐になわつけて、海へ入れられるが気安いような、と島も海も目に見えて、ふらふらと月の中を、千鳥が、冥土の使いに來て、連れて行かれそうに思いました。……格子前へ流しが來ました。

新町の月影に、露の垂りそうな、あの、ちらちら光る撥音で、



……博多帯しめ、筑前絞り——

と、何とも言えぬ好い声で。

(へい、不調法、お喧しゆう、) って、そのまま行きそうにしたのです。

(ああ、身震がするほど上手い、あやかるように拝んで来な、それ、お賽銭をあげる  
気で。)

と滝縞お召の半纏着て、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてやった姉さんが、長  
火鉢の抽斗からお宝を出して、キイト、あの縺子が鳴る、帯へ挿んだ懷紙に捻って、私  
に持たせなすつたのを、盆に乗せて、戸を開けると、もう一二間行きなさいます。二人の  
間にある月をな、影で繋いで、ちやつと行つて、

(是喃。) と呼んで、出した盆を、振向いてお取りでした。私や、思わずその手に縋って、  
涙がひとりでに出来ました。男で居ながら、こんなにも上手な方があるものを、切めてそ  
の指一本でも、私の身体についたらばと、つい、おろおろと泣いたのです。

頬被をしていなすつた。あのその、私の手を取ったまま——黙って、少し脇の方へ  
退いた処で、(何を泣く、) って優しい声で、その門附が聞いてくれます。もう恥も何も  
忘れてな、その、あの、どうしても三味線の覚えられぬ事を話しました。」

## 二十

「よく聞いて、しばらく熟と顔を見ていなきいました。

（芸事の出来るように、神へ願懸がんかけをすると云つて、夜の明けぬ内、外へ出る。鼓ヶ嶽の裾にある、雑樹林の中へ来い。三日とも思いうけれど、主人には、七日と頼んで。すぐ、今夜の明方から。……分つたか。若い女の途中が危あぶない、この入口まで来て待つてやる、化ばかされると思うな、夢ではない。……）

とお言いのなり、三味線を胸くつに附着けて、フイと暗がりへ附着いて、黒塀いを去いきなさいます。……

その事は言わぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離こり取つて、願懸けすると頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。

殺されたら死ぬ気でな、——大恩のある御主人の、この格子戸も見納めか、と思うよう  
で、軒下へ出て振返つて、門かどを視ながめて、立つているとな。

（おいで、）

と云つて、突いきなり然うしろ、背後から手を取りなすつた、門附のそのお方。

私はな、よう覚悟はしていたが、天狗様に攫さらわれるかと思ひましたえ。

あとは夢やら現うつつやら。明方内へ歸つてからも、その後は二日も三日もただ茫ぼうとしておりましたの。……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流ながれの音と聞えます、雑木の森の暗い中で、その方に教わりました。……舞も、あの、さす手も、ひく手も、ただ背後うしろから背中を抱いて下さいますと、私の身体からだが、舞いました。それだけより存じません。

もつとも、私が、あの、鳥羽の海へ投入られた、その身の上も話しました。その方は不思議な事で、私とは敵かたきのような中だ事も、いろいろ入組んではおりますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言うな、と口留めをされました。何んにも話がりません。

五日目に、もう可いから、これを舞つて座敷をせい。芸なし、とは言うまい、ツて、お記念かたみなり、しるしなりに、この舞扇を下さいました。」

と袖で胸へしつかと抱いて、ぶるぶると肩を震わした、後おくれげ毛がはらりとなる。

捻平溜息ためいきをして領うなずき、

「いや、よく分つた。教え方も、習い方も、話されずとよく分つた。時に、山田に居て、どうじゃな、その舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめて謡うたいました時は、皆みんなが、わつと笑うやら、中には恐おそろい怖こいと云う人もござんす。なぜ言いうと、五日ばかり、あの私わたしがな、天狗様に誘いひ出された、と風説うわさしたのでござんすから。」

「は、いかにも師匠が魔でなくては、その立方は習われぬわ。むむ、で、何かの、伊勢にも謡うたうたうものの、五人七人はあろうと思うが、その連中には見せなんだか。」

「ええ、物好ものずきに試すつて、呼んだ方もありましたが、地をお謡うたいなさる方が、何じややら、ちつとも、ものにならぬと言いつて、すぐにお留やめなさいましたの。」

「ははあ、いや、その足拍子を入れられては、やわな謡うたは断ちぎれて飛ぶじやよ。はははは、唸うなる連中粉灰こつばいじやて。かたがたこの桑名へ、住替すきものえとやらしたのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠ほえて飛ぶ処は、梟ふくろうの憑つきもの物がしよつた、と皆氣違きちがいにしなさいます。姉さんも、手放すのは可哀相あはれなや言いつて下さいましたけれど、……周囲まわりの人が承知まわりませず、……この桑名の島屋とは、行ゆかいはせぬ遠い中でも、姉さんの縁ゆかり続きでござんすから、預けるつもりで寄越よこされましたの。」

「おお、そこで、また辛い思おもいをさせられるか。まずまず、それは後でゆっくり聞きこう。……そのお娘こ、私わたしも同おんなじ一じや。天魔でなくて、若い女おんなが、術わざをするわと、仰天おぼろしたので、

手を留めて済まなんだ。さあ、立直して舞うて下さい。大儀じやろうが一さし頼む。私も久ぶりひさしで可懐なつかしい、御身おんみの姿で、若師匠の御意を得よう。」

と言の中に、膝で解く、その風呂敷の中を見よ。土佐の名手が画えがいたような、紅あかしらべい調は立田川たつたがわ、月の裏皮、表皮。玉の砧きぬたを、打つや、うつつに、天人も聞けかして、雲井、と銘めいある秘蔵の塗ぬりどう胴おん。老の手捌てさばき美しく、錦にしきに梭ひを、投ぐるよう、さらさらと緒しを緊しめて、火鉢の火に高く翳かざす、と……呼吸いきをのんで驚いたように見ていたお千は、思わず、はつと両手を支ついた。

芸の威厳は争われず、この捻平を誰とかする、七十八歳の翁おきな、辺見秀之進。近頃孫よに代よを譲つて、雪せつ叟そとて隠居した、小鼓取つて、本朝無双の名人である。

いざや、小父おじこ者は能役者、当流第一の老手、恩地源三郎、すなわちこれ。

この二人は、侯こうしやく 爵津かくづの守かみが、参宮の、仮やかたの館やかたに催された、一調の番組を勤め済しまして、あとを膝栗毛で帰る途中であつた。

さて、うどんや 饅頭屋では門附の兄哥あにいが語り次ぐ。

「いや、それから、いろいろな勿体つける所作があつて、やがて大坊主が謡うたい出した。

聞くと、どうして、思ったより出来ている、按摩はり鍼の芸ではない。……戸外おもてをどツツと

吹く風の中へ、この声を打撒ぶちまけたら、あのパイパイ笛ぐらいに纏まとまろうというもんです。

成程、随分なかま夥間には、此奴こいつに（的等。）扱あいにされようというのが少くない。

が、私に取しつちや小敵しょうてきだった。けれども芸は大事あなごです、侮あなごるまい、と気を緊しめて、

そこで、膝を。」

と坐すわり直なおると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋えもんが緊しまる。

「……この膝を丁ちようと叩たたいて、黙もくつて二ツ三ツ拍子を取ると、この拍子が尋常ただんじゃない。

……親なり師匠の叔父おじの膝ひざに、小児こどもの時ときから、抱かかれて習なつた相伝だ。対手あいての節ふしの隙間

を切きつて、伸縮のびちぢみを緊しめつ、緩ゆるめつ、声の重味おもを芻はね上げて、咽喉のどの呼吸こそを突崩つす。寸法

を知らず、間拍子の分らない、まんぎらの素人は、盲目めくら聾らんぼで気にはしないが、ちと商売

人の端くれで、いささか心得のある対手あいてだと、トンと一つ打たれただけで、もう声こゑが引ひつ

掛かつて、節ふしが不状ぶじまに蹴躓けつまず。三味線あの間まも同一おんなじだ。どうです、意気いなお方に鈞ひ合かわ

ぬ……ン、と一ツ芻はねないと、野暮ぬかな矢の字やじが、とうふにかすがい、糠ぬかに釘くわでぐしやりと

ならあね。

さすがに心得のある奴だけ、商売人にびたりと一ツ、拍子で声を押伏せられると、張つた調子が直ぐにたるんだ。思えば余計な若気の過失、こっちは畜生の浅猿しさだが、対手は素人の悲しさだ。

あわれや宗山。見る内に、額にたらたらと衝と汗を流し、死声を振絞ると、頤から胸へ膏を絞つた……あのその大きな唇が海鼠を干したように乾いて来て、舌が硬つて呼吸が発奮む。わなわなと震える手で、畳を掴むように、うたいながら猪口を拾おうとする処、ものの本をまだ一枚とうたわぬ前、ピシリとそこへ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、ドン底から節が抜けたものらしい。

はつと火のような呼吸を吐く、トタンに真俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のように畳を嘗めた。

(先生、御病気か。)

つて私あ莞爾したんだ。

(是非聞きたい、平にどうか。宗山、この上に聳になつても、貴下のを一番、聞かすには死なれぬ。)

と拳こぶしを握にぎつて、せいせい言いつてる。

(按摩さん。)

と私は呼よんで、

(尾上町の藤屋まで、どのくらい離はなれている。)

(何なにんで、)

と聞きく。

(間によつては声こゑが響ひびく。内証うちしやうで来きたんだ。……藤屋には私の声こゑが聞きかしたくない、叔父おじが一人寝ひてござるんだ。勇士ゆうしは霜しもの氣勢けいせいを知しるとさ——たださえ目敏めざとい老人としよりが、この風かぜだから寝苦ねくるしがつて、フト起きてでもいるとならない、祝儀しゆぎは置おいた。帰かえるぜ。)

ト宗山むねやまが、凝じつと塞ふさいだ目を、ぐるぐると動うごかして、

(暫しばらく、今の拍子しぼりを打ちなされ……古市ふるいちから尾上町おしやままで声こゑが聞きえようか、と言いいなされる、御大言ごたいげん、年としのお少わかさ。まだ一度ひとたびも声こゑは聞きかず、顔かほはもとより見みた事こともなけれども……当流たうりゆうの大師匠おほしやう、恩地源三郎おんぢげんざぶろうどの養子やしよと聞きく……同じ喜多八きたはち氏の外ほかにはあるまい。さようでござろう、恩地おんぢ、)

と私わたしの名なをちやんと言いう。



ああ、酔った、」

と杯をぼたりと落した。

「饒舌しやべつて悪い私の名じやない。叔父に済まない。二人とも、誰にも言うな。……」

と鷹揚おうようで、按摩と女房に目をあしらい。

「私は羽織の裾を払って、

(違つたような、当つたようだが、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の山、宗山か。若布わかめの附焼でも土産に持つて、東海道を這はい上れ。恩地の台所おとすから音信れたら、叔父には内証で、居候の腕白が、独楽こまを廻す片手間に、この浦船でも教えてやろう。)

とずつと立つ。

二十二

「痘瘡あばたの中に白眼しろまなこを剥むいて、よたよたと立上つて、憤いきどおつた声ながら、  
(可懐なつかしいわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。触らせて下され、つかまらせて下され、  
一撫ひとなで、撫なでさせて下され。)

と言う。

いや、撫られて堪りますか。

摺<sup>すりぬ</sup>抜けようとするんだがね、六畳の狭い座敷、盲目でも自分の家<sup>うち</sup>だ。

素早く、階<sup>はしご</sup>子段<sup>ごだん</sup>の降口<sup>ふせ</sup>を塞いで、むずと、大手を拵<sup>つ</sup>げたらう。……影が天井へ懸<sup>か</sup>つて、

充<sup>いっぱい</sup>満<sup>まん</sup>の黒坊主<sup>あせあぶら</sup>が、汗<sup>あせ</sup>膏<sup>あぶら</sup>を流して撫<sup>な</sup>じようとす。

いや、その嫉妬<sup>しつとしゆうぢやく</sup>執<sup>しつ</sup>着<sup>しつ</sup>の、険な不思議の形相<sup>かたち</sup>が、今もつて忘れられない。

(可<sup>い</sup>厭<sup>い</sup>だ、可<sup>い</sup>厭<sup>い</sup>だ、可<sup>い</sup>厭<sup>い</sup>だ。)と、こつちは夢中に出ようとす、よける、留める、行違<sup>ちが</sup>うで、やわな、かぐら堂の二階中<sup>ふたかいちゆう</sup>みしみしと鳴る。風は轟<sup>ごうごう</sup>々と当る。ただ黒雲<sup>くろぐも</sup>に捲<sup>ま</sup>かれ  
たように、可<sup>おそろ</sup>恐<sup>おそ</sup>しくなつた、凄<sup>すし</sup>さは凄<sup>すし</sup>し。

衝<sup>つ</sup>と、引<sup>ひ</sup>潜<sup>ひそ</sup>つて、ドンと飛び摺<sup>すり</sup>りに、どどどと駈<sup>か</sup>け下りると、ね。

(袖<sup>そで</sup>や、止めませい。)

と宗山<sup>むねやま</sup>が二階<sup>ふたかい</sup>で喚<sup>わめ</sup>いた。皺<sup>しわ</sup>枯<sup>かれ</sup>声<sup>こゑ</sup>が、風でぱつと耳に当ると、三四人立騒<sup>たちさわ</sup>ぐ女の中から、  
すつと美しく姿を抜いて、格子を開けた門<sup>かど</sup>口<sup>ぐち</sup>で、しつかり掴<sup>つか</sup>まる。吹きつけて揉<sup>も</sup>む風で、  
颯<sup>さつ</sup>と紅<sup>あか</sup>い棲<sup>つま</sup>が搦<sup>から</sup>むように、私に縋<sup>すが</sup>つたのが、結綿<sup>ゆいわた</sup>の、その娘<sup>むすめ</sup>です。

背中を揉<sup>も</sup>んでた、薄茶<sup>うすちや</sup>を出した、あの影法師<sup>かげぼうし</sup>の妾<sup>めかけ</sup>だらう。

ものを言う清すずしい、張はりのある目を上から見込んで、構かまうものか、行きがけだ。

(可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物おもちゃにされるな。)

と言捨てつっぱなに突放なげす。

(あれ。 )と云う声があうしろへ、ぱつと吹飛ばされる風に向つて、砂塵しゃじんの中へ、や、躍おど込むようにして一散かに駈かけて返つた。

後のちに知つた、が、妾めかけじやない。お袖そでと云うその可愛いのは、宗山の娘だつたね。それを娘と知つていたら、いや、その時だつて気が付いたら、按摩あんまが親の仇敵かたきでも、私わたしあ退治わづしるんじやなかつたんだ。」

と不意ふいにがツくりと胸を折つて俯向うつむくと、按摩の手が、肩かたを這すべつて、ぬいと越す。……その袖の陰で、取るともなく、落した杯さかずきを探りながら、

「もしか、按摩が尋ねて来たら、堅く居おらん、と言え、と宿のものへ吩咐いひつけた。叔父のすやすやは、上首尾で、並べて取つた床の中へ、すつぽり入つて、引被ひっかぶつて、可心持いひに寝たんだが。

ああ、寝心の好いい思いひをしたのは、その晩ばんきりさ。

なぜツて、宗山がその夜うちの中に、私わたしに辱はずかしめられたのを口惜くやしがつて、傲慢ごうまんな奴やつだけに、

びしりと、もろい折方、憤死してしまつたんだ。七代まで流儀に祟る、と手探りでにじり書した遺書を残してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だった。あの広場の雑樹へ下つて、夜が明けて、ヤツと小止になつた風に、ふらふらとまだ動いていたとき。

こつちは何にも知らなからう、風は風ぐ、天気は可。叔父は一段の上機嫌。……古市を立つて二見へ行つた。朝の中、朝日館と云うのへ入つて、いずれ泊る、……先へ鳥羽へ行つて、ゆつくりしようとして、直ぐに車で、上の山から、日の出の下、二見の浦の上を通つて、日和山を棧敷に、山の上に、海を青畳にして二人で半日。やがて朝日館へ帰る、……とどうだ。

旅籠の表は黒山の人だからで、内の廊下もごつた返す。大袈裟な事を言うんじやない。伊勢から私たちに逢いに来たのだ。按摩の交事と遺書とで、その日の内に国中へ知れ渡つた。別にその事について文句は申さぬ。芸事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謡が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたろう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不所存もの、恩地源三郎が申渡す、向後一切、謡を口にする事罷成らん。立処に勘当だ。さて宗山とか云う盲人、己が不束なを知つて屈死した心、かくのごときは芸の上の鬼神なれば、自分は、葬式の送迎、

墓に謡を手向きよう、と人々と約束して、私はその場から追出された。

あとの事は何も知らず、その時から、津々浦々をさすらい歩行く、門附の果敢い身の上。  
」

二十三

「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあつたを工面したのがはじまりで、一銭二銭、三銭じゃ木賃で泊めぬ夜も多し、日数をつもと野宿も半分、京大阪と経めぐつて、西は博多まで行つたつけ。

何んだか伊勢が気になつて、妙に急いで、逆戻りにまた来た。……

私が言つたただ一言、（人のおもちやになるな。）と言つたを、生命がけで守つてゐる。……可愛い娘に逢つたのが一生の思出だ。

どうなるものでもないんだから、早く影をくりましたが、四日市で煩つて、女房さん。と呼びかけた。

「お前さんじゃないけれど、深切な人があつた。やつと足腰が立つたと思ひねえ。上方筋

は何でもない、間違つて謡を聞いても、お百姓が、（風呂が沸いた）で竹法螺吹くも同然だが、東へ上つて、箱根の山のどてつばらへ手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、どう我慢がなるものか！ うっかり謡をうたいそうで危くつてならないからね、今切は越せません。これから大泉原、員弁、阿下岐をかけて、大垣街道。岐阜へ出たら飛騨越で、北国筋へも廻ろうかしら、と富田近所を三日稼いで、桑名へ来たのが昨日だった。その今夜はどうだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなつてこの家へ飛込んだ。が、流の笛が身体に刺る。いつもよりはなお激しい。そこへまた影を見た。美しい影も見れば、可恐しい影も見た。ここで按摩が殺す気だろう。構うもんか、勝手にしろ、似たものを引つけて、とそう覚悟して按摩さん、背中へ掴つてもらつたんだ。

が、筋を抜かれる、身を撈られる、私が五体は裂けるようだ。」

とまた差俯向く肩を越して、按摩の手が、それも物に震えながら、はたはたと戦きながら、背中に獅噛んだ面の附着く……門附の袷の褪せた色は、膚薄な胸を透かして、動悸が筋に映るよう、あわれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛一つ搦みついたように凄く見える。

「誰や！」

と、不意に吃驚したような女房の声、うしろ見られる神棚の灯も暗くなる端に、べろ

べろと紙が濡れて、門の腰障子に穴があいた。それを見咎めて一つ喚く、とがたがたと、  
あしおと登音高く、か駈け退いたのは御亭どの。

いや、困った親仁が、一人でない、薪まきぎ雑棒、棒千切れで、二人ばかり、若いものを連れていた。

「御老体、」

雪叟が小鼓をし緊めたのを見て……こう言つて、恩地源三郎が儼然げんぜんとして顧みて、

「破格のお附合おそれい、恐多おそれいな。」

と膝に扇を取つて会釈をする。

「相変らず未熟でござる。」

と雪叟が礼を返して、そのまま座を下へおりんとした。

「平に、それは。」

「いや、蒲団の上では、お流儀に失礼じゃ。」

「は、その娘この舞が、甥おいの奴おものか倂かゆえに、遠慮した、では私も、」

と言つた時、左右へ、敷物をひと齊しくは刎ねた。

「嫁女、嫁女、」

と源三郎、二声呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思うぞ。喜多八の叔父源三郎じゃ、更めて一さし舞え。」

二人の名家が屹と居直る。

瞳の動かぬ気高い顔して、恍惚と見詰めながら、よろよると引退る、と黒髪うつる

藤紫、肩も腕も嬌娜ながら、袖に構えた扇の利剣、霜夜に声も凜々々と、

「……引上げたまえと約束し、一つの利剣を抜持つて……」

肩に綾なす鼓の手影、雲井の胴に光さし、艶が添って、名誉が籠めた心の花に、調の緒の色、颯と燃え、ヤオ、と一つ声が懸る。

「あつ、」

とばかり、屹と見据えた——能楽界の鶴なりしを、雲隠れつ、と惜まれた——恩地喜多八、饅頭屋の床几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！ 鼓を打つ！」と身を揉んだ、胸を切めて、慌しく取って蔽うた、手拭に、かつと血を吐いたが、かなぐり棄てると、右手を掴んで、按摩の手をしつかと取つた。



「崇らば、崇れ、さあ、按摩。湊屋の門まで来い。もう一度、若旦那が聞かしてやろう。」  
と、引立てて、ずいと出た。

「(源三郎) ……かくて竜宮に至りて宮中を見れば、その高さ三十丈の玉塔に、かの玉をこめ置、香花を備え、守護神は八童並居たり、その外悪魚鰐の口、遁れがたしや我命、さすが恩愛の故郷のかたぞ恋しき、あの浪のあなたにぞ……」

その時、漲る心の張りに、島田の元結ふつと切れ、肩に崩るる緑の黒髪。水に乱れて、灯に揺めき、暈の海は裳に澄んで、塵も留めぬ舞振かな。

「(源三郎) ……我子は有らん、父大臣もおわすらむ……」

と声が幽んで、源三郎の地謡う節が、フト途絶えようとした時であった。

この湊屋の門口で、爽に調子を合わせた。……その声、白き虹のごとく、衝と来て、お三重の姿に射した。

「(喜多八) ……さるにてもこのままに別れ果なんかなしきよと、涙ぐみて立ちしが……」

「やあ、大事な処、倒れるな。」

と源三郎すつと座を立ち、よろめく三重の背を支えた、老の腕に女浪の袖、この後見の

大磐石に、みるの緑の黒髪かけて、颯と翳すや舞扇は、銀地に、その、雲も恋人の影も立添う、光を放つて、灯を白めて舞うのである。

舞いも舞うた、謡いも謡う。はた雪叟が自得の秘曲に、桑名の海も、トトと大鼓の拍子を添え、川浪近くタタと鳴つて、太鼓の響に汀を打てば、多度山の霜の頂、月の御在所ヶ嶽の影、鎌ヶ嶽、冠ヶ嶽も冠着て、客座に並ぶ氣勢あり。

小夜更けぬ。町凍てぬ。どことしもなく虚空に笛の聞えた時、恩地喜多八はただ一人、湊屋の軒の蔭に、姿蒼く、影を濃く立つて謡うと、月が棟高く廂を照らして、渠の面に、扇のような光を投げた。舞の扇と、うら表に、そこでびたりと合うのである。

「（喜多八）……また思切つて手を合せ、南無や志渡寺の観音薩埵の力をあわせてたびたまえとて、大悲の利剣を額にあて、童宮に飛び入れば、左右へはつとぞ退いたりける、」

と謡い澄ましつつ、

「背を貸せ、宗山。」と言うとともに、恩地喜多八は疲れた状して、先刻からその裾に、大きく何やら踞まった、形のない、ものの影を、腰掛くるよう、取つて引敷くがごとくにした。

路一筋白くして、掛行燈かけあんどんの更けたかなたこなた、杖を支ついた按摩も交つて、ちらちら  
と人立ちする。

明治四十三（一九一〇）年一月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

※底本で句点が抜けている箇所は親本を参照して補いました。

※誤植を疑った箇所はちくま日本文学全集を参照しました。

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2002年1月9日公開

2005年9月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 歌行燈

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>